
それは誰かの足跡

八代ゆかな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

それは誰かの足跡

【Zコード】

Z5018F

【作者名】

八代ゆかな

【あらすじ】

人や物、自然について思ったことや感じたこと、ある何かについてふと思いついたことを文に綴つてみました。

支えあい

月と太陽。

それはこの世を分ける一つの光。

昼と夜… それは太陽と月がいる世界。

お互いが譲り合って、領地 治める時を分けた。

だから、相手の時間の間は姿を隠して田立たないよ! とする。

それは絶対の掟。

誰もが知る世界の決まり。

暗黙のやり取り。

昼に生きる太陽と夜に生きる月はお互いを認め合って、ちやんと理解しあつて支えあってともに長い時を重ねてきた。

決して同じ時を生きてることはないけれど、その分同じよつに長い時を積み重ねて出来るだけ近づきたいと希つた。

その願いが叶わぬものだとしても良いのだと、叶ってはならぬと、胸の内で小さく呟きながら。

それでも願わずにほいられないのだ。

一つの光は永久に近くある。

他の生命はたやすく枯れてしまつ。

だからこそ、月と太陽をお互いを容認し、大事だと思いあつ。

時は不滅に流れゆく。

永遠に等しき生命を授かつた数少ない同士だから。

そこに居て。

いつ終わるやら判らぬ生命をひとりで生きるのは寂しいから。

だから。

この関係を保つためになら、

太陽が地上を照らすときは月は蔭に控え、月が地上を照らすときは太陽は蔭に身を投じる。

全てはお互いのために。

一秒前と一秒後

未来。

それはいつか必ずやつてくれるもの。

一秒先だってそれは確かに未来の世界。

いつか途切れるそれは人が悲しみに暮れても、絶望に満ちても絶対にやつてくる。

約束された時をリッセトしにやつてくる。

何かが始まるのも、終わりが来るのも全て未来があるから。

過去と未来は繋がっているから人は生きていく。

振り返る思い出をくれる。

生きた証をくれる。

誰しも持つている可能性が生きる世界。

何も見えなくても判らなくても、手探りであっても進もうとすれば切り開ける。

そこに必ずあるものが未来。

目に映らなくとも、触るひとが出来なくとも、その肌でふとしたき

つかけでとても身近に感じられる。

ほら、そこにあるでしょ？

感じるでしょ、人を伝って。

空気を伝って、風を伝って……。

感じよつと思えばいつだってそれは感じられるんだよ。

すぐ側でいつも控えている。

時を紡いでずっと永久にあり続ける。

たとえ人が世界から消えて、何も無くなつたとしても時が流れる限り未来は無限大の可能性を秘めて、はじめるときを静かに待つている。

たとえ僕がこの世界から消えてしまつても世界に、人々に明日未来が来るよつ。

永遠に終わらないそれは無限の可能性。

過去。

それは何のためにあるの？

人が生きるついで常に付きまとつもの。

それが過去。

一秒前だつてそれは確かに過去になつてゐる。

可笑しいよね。

全然実感無いのに、それは確かに過去として世界に刻まれてゐるんだ。

流れた時間だから、もう一度と戻つてはこないんだ。

取り戻せないんだ、どんなに悔やんでも。

どんなに欲しても。

もし一秒前に死んだ人がいるとしよう。

その人は一秒前まで確かに生きていて、自我を持つて動ける体を所
有していた。

だけど、一秒後にはもう死んで居ないんだ。

どこかへ消えちゃってる。

取り戻せないんだ。

終わってしまったことだから。

たつた一秒だって命取りなんだよ。

一秒前までは生きていた。

一秒後には死んでいた。

それってほんの少しの違いで世界が変わったってことなんだ。

そう思うと怖いな。

人は未来を知ることが出来ない。

だから、過去に起きたことを嫌なことを一秒先の未来で悔やむ。

過去を一度も悔やまなかつた人なんて居ないはずだ。

きっと、一度は悔やんでる。

あの時ああしておけばよかつたとか、あの時こうしていれば…とか、

あるはずだ。

それが人を苦しめていく。

では、過去は人を苛むものなのかな？

それは少し違うと思いつ。

過去は確かに取り返しがつかないから、くよくよとそのことを引きずつて人を立ち直れなくさせるかもしれない。

だけど、それらを乗り越えれば人は強くなれるんだ。

また一つ成長するんだ。

嫌なことであればあるほど、辛いことであればあるほど、忘れずに応用していくんだ。

もう一度と同じことを繰り返さないためにとか、そういうことは少々無理があるよね。

たとえば人の死。

人の死はどうしたって必ず来る。

それは生きている中で、何度も経験することだらう。

止める事はできないだらう、繰り返さないなんて事は出来ないだらう。

だけど、応用は出来るよね。

同じ過ちを犯したくないなら、ちゃんと出来ることをしよう。

したいことをその人が居るついで、居てくれるついで止められない死だと判ったのなら、思に残さずやりたいことを徹底的にやる。

未練なんて残らないくらい…。

一秒先だって何が起るかわからないんだ。

取り戻せなくなつたって、悔やまないくらい楽しい思い出を作つておけば良いんだ。

悔やまないよつて過去を応用して生きればいいんだ。

それが過去が在る理由の全てだとは言わないので、少なくとも僕は悔やむ度に応用して上手に生きたいんだ。

過去にあるのは辛い思い出ばかりじゃない。

樂しい思い出だって上手に応用すれば、未来にプラスされるかもしない。

樂しい思い出だって人を強くする。

不安なとき、振り返れば安心させてくれる。

寂しいとき、思い出せば心を暖かくしてくれるわでしょ。

楽しい 明るい思い出は人の不の部分を取り除いて、たとえそれが一時的なものだとしても勇気を与えてくれる。

それが過去。

結局のところ、過去は人の成長を促す風のよつも…なのかもしない。

毎日の積み重ねが僕等を大きくする。

感じるもの

夢。

形のないもの。

触れないもの。

でも、確かにそこにあるもの。

それが僕の夢。

憶えてる夢と憶えてない夢。

必要のあるものと必要のないものみたいに割り切られる。

一歩進んで手に入れた。

もう一歩進んだら、はじけて消えた。

まるでシャボン玉。

大きな穴へ落ちた。

そこは夢のゴミ箱。

忘れ去られた夢たちが眠る場所。

そつと閉じられた引き出しみたいに普段は触れないところ。

良い夢も悪い夢も… ありがと!!。

小ちな 一歩を僕にくれた。

悪気をくれた。

背を押して、『行つておこで』と明日を生きるために心援してくれる気がする。

それは一日が終わって、また次の一日を生きるために用意されて いる試練のような気がする。

どうして夢を見たのかわからぬいけれど。

どうして夢を見るのかわからぬいけれど。

夢は過去から未来への架け橋。

優しさはとても嬉しい、とても悲しい。

優しさはとても心地良くて、とてもいや。

痛くて、苦しく…けれど、優しくしてもう少し心して心が泣
めてしまう。

温かくて、同じように僕も誰かに優しくしたい気持ちになる。

それほど良いこと。

きっと僕に優しくしてくれた人も、誰かに優しくされたんだ。

そうして受け継がれていく優しい気持ちとてもいいと思う。

お父さんお母さん

『朝。』

田もくらむほどに明るい朝は嫌いじゃない。

ナビ、好きでもない。

夢から現実へと起しそうやつてくる光りはどうでも嫌い。

まだ眠いんだよ…。

言い訳なんて全然聞いてくれないで、毎朝毎朝凝りもせずに眩しい光りで僕を照らしにやってくる。

時計の針が正午を刻む頃には色が濃くなつて、なんか老けたみたいになる。

ねえ、歳とつたかい？

…けれど、きつとまた次の日にはまた若返つてゐるんだろうなあ。

そう思つと、なんだか少し…げつそつとした気分になる。

そう思つのつて僕だけなのかな？

ああ… そうだ。

このとときはもう朝ひて言わないな…。

『暁。』

老けたから名前が変わったんだな、きっと。

ほら。

太陽も朝より上に上がってる。

老けたんだね…。

朝が老けると暁になる。

暁が老けると夕方になる。

夕方の空は赤く染まって好き。

小さい頃は悲しい気分にさせられて嫌いだったけど、今はとても
気に入ってる。

オレンジのかかつた夕暮れはとても綺麗。

橙色から藍色に変わる瞬間も好き。

お父さんが眠って、お母さんにバトンタッチする瞬間。

お父さんである朝が老けた昼が更に老けて夕暮れになると、知的美人な『夜』であるお母さんが活躍する。

また明日の朝も起こしに来るんだろうなあ……若いお父さんの朝が。

『夜。』

夜は好きだ。

どんな時もいつもひんやりと冷めていて、とてもクールだ。

暗闇に住んでいるところが好き。

鳶色のカーテンで素顔を隠してこるのが好き。

月を目立たせて脇役に納まつてるとこらが好き。

……夜ってかなり照れ屋だ。

僕達を眠りに誘う歌を聞かせてくれる。

優しい子守唄はどこからか静かに聴こえてきて、気が付けば包まれて眠ってる。

ずっと見守っていてくれる黒い存在は誰もが知っている自然のお母さん。

『朝』がお父さんなら『夜』はお母さん。

対だけど、一つは一つのカラダに住んでいる。

『空』とこう神様の中に生きてこむ。

全てを覆いつぶしてくれる闇。

その瞬間だけ自分が判らなくなるけれど、僕はその時間が好き。

色々考えさせてくれる空間だから。

元気で明るい『朝』と落ち着いてクールな『夜』。

ひんやつと身にまとわり付いてくる匂氣せ、その日のことを振り返つて反省させる不思議な力がある。

そんなところでお母さん。

黒い色を好んで明るみには絶対に出でこないけれど、我が子を見つめるときの眼は、心はいつも温かい。

夜は好きだ。

世界を黒く自分色に染めるナビ、僕を安心させてくれる。

明日も頑張りつつ思える。

円みたいな丘立つ」とはしないけれど、とても落ち着いていて羨ましくなる。

まだまだ小やこなーって悔しくなるときだってあるけれど、まだまだ時間はあるからと思える。

『朝』が明るいお父さんなら、『夜』はクールなお母さん。

縛るもの

『言葉。』

それは時に人を傷付ける刃物。

それは時に人を強くする魔法。

どちらにしろ、人に多少の影響を与えるもの。

人が人と繋がっている為に駆使する道具、手段。

人の心を縛るのに一番適している観えぬ糸。

貴方はそれを意識して言葉という鎖を使ったことがありますか？

意識して使う人は、意識して使った人はきっと少ないんだと思う。

無意識が知つていながらにして、なんとなくこうなると解つていいながらにして、けど、それを認識していない意識が使つ……ことならあるかもしねれない。

だけど、きっと人はそれが他人を縛り付けるものとして放つことはないのだと思う。

きわめて稀、だ。

言葉は己との駆け引きだ。

よく考えて使わないと泣きを見ることになる。

言葉は他人との駆け引きだ。

よく考えて言葉の選択をしないと痛い田を見る事になる。

いわば細い綱をつま先で渡っている状態だ。

バランスを崩せば転落。

調和出来なければ真っ暗だ。

言葉は心を蝕む。

言葉は己を成立させる。

言葉は世界を振動させる。

言葉は弱き人がいつも装備している武器だ。

人を生かす事もできる最高の。

人が知らない人だけの能力。

それが『言葉』。

ある人は言った。

約束はどうして交わされるのかと問つた僕に言った。

『約束は守るためにあるのですか?』

『約束は破るためにするのですか?』

『約束は悲しくさせるために交わすのですか?』

『約束は人を喜ばせるために『えるものですか?』

尽きなかつた僕の質問をある人は難なく答えた。

約束は心を通わした者同士が交わす契りのこと、だと。

それは裏切ることを好としない…と。

だから、約束は交わすものではないと。

心がひどく痛むから… とも言つた。

『では、約束は人を生かすものではないのですか？殺すものなのですか？』

すると、ある人は困ったふうに笑つた。

『約束は人を縛るためにあるのを』

そう言つた人も約束に縛られていた。

言葉と言づ音に乗せられて交わした約束に 。

いつか僕も約束を交わしたのなら、あんなふうに苦しみにいるのだろうか。

…それも一興かも知れないな。

「」にバカがひとり

息を吸つて息を吸つて、吐いた。

また一つ息を吸つては吐いた。

大きく吸つて、小さく吐いた。

準備はいい？

さあ、位置について。

用意！

それで、それから、何を、どうするんだい？

今更に首を傾げてしまった。

だつて、何をするつもりだったのか、忘れてしまったから。

仕方ないじゃないか。

思い出そうとしても思い出せないんだから。

「」にバカがひとり。

世界に取り残されたバカがひとり。

出遅れたんだ。

バカだつたから。

緊張して緊張して。

心臓がバクバクしてたんだ。

だから、それを少しでもほぐそうと深呼吸を何度も繰り返してたんだ。

これ以上緊張してカチカチになつてしまわないようになつてしまつて、ただそれだけに意識を集中させていたら、そしたら……忘れてしまつていたんだ。

何をするつもりだったのか。

なんでそんなにカチカチになつていていたのかが、分からなくなつてしまつたんだ。

ほつかりと穴を開けて緊張が記憶が消去してしまつたようだ。

息を吸って吐いて

それから？

位置について述べることとする。

それとも、準備運動？

ここに首を傾げたバカがひとり。

いつまでそうしているのか。

いつからそうしていたのかさえもう想い出せない。

だから、いつまでもそうしているのか…。

世界に忘れられたバカ。

だつて、一つのことに頭をとられると、これから何をするのかさえ覚えてられなくなるような奴だったから戦力外だつて置いてかれただんだ。

ひどい話だと思わない?

…え?

僕の頭がひどいってかい?

……世界が賢すきただけだよ。

そして、また息を吸つて大きく吐き出したんだ。

思い出すのに頭を使いすぎて疲れちゃつたから息抜きにそうしたんだ。

だけど、あれ…。

何をしてたんだっけ?

何に頭を使って僕は疲れたんだろ？

そうしてまた僕は息を吸つて吐き出すんだ。

そして、また何を考えていたのか忘れてしまったんだ。

平等がない理由

人は誰しも皆平等。

そんなこと、一体誰が言い出したんだろ？。

平等って何だ？

並等しく差別のないことをいつのか？

この世に平等なんてないんだよ。

だって、生まれてくるのですからその姿に等しいなんて必ず『えら
れてない。

身体機能の低さとか、色々問題をかかえて生まれてくる者もいれ
ば、無事に生まれてくる者がいるように。

平等なんて、この世に誕生した無知なときからでもないじゃない
か。

だから、きっと…ああ。

そうだ。

全てを持った人を羨んだ人がそんなことを言い出したんだ。

『人は誰しも平等である…はずだ』と。

それはとても心惹かれる言葉だけれど。

…でもね、やっぱっここの世にそんな平等なんて、存在しないんだ
よ。

人は他人より特別でいたいはずだから。

その心が消えない限り、この世に平等は誕生しない。

「あーーお前、何自分のだけ多く取つてんだよ。ずるいぞつ

「ふつ。そんなこと、俺の知つたことか。あえて言つなら、俺ひ
とりに夕飯の準備させたお前が悪いんだ」

「平等に分けるべきだろ、ここはま

「ちがうだろ。ここは俺が仕切つてんだからお前は従うべきな

のぞ

「不公平だ。不平等だ」

「バーカ、何言つてんだよ。この世においてなあ、何もかも全て同じく、等しく、差別なくなんてことあるわけないだろ。だから、今回のおかず」としても多少の差が出たんだって。そだけだってば」

「ちーがーうう…。お前が特別に自分のを多く盛ったんだろ。絶対そうだつて！お前はそんな奴だつて！」

「お前だつてそだらうが！もし同じ立場に立つたら自分のだけ多く盛るだろ？…はあ…言つちまつた。…まあ、でも、入つてのは大体そんなもんなんだよ。自分は特別なんだよ。つーか、そんなことする奴だつて知つてる上で俺に夕飯の支度を押し付けたのはお前だぞ。文句なんか言うな、アホ」

「うう…」

これが現実です。

ね？

平等なんて、ないでしょ？

だつて、それ、俺の好物だもん。

そんなときに夕飯の支度任せたりしたら、つい人のより多く盛つちゃうよね？

だから、自分は特別　という心がなくならない限り、この世に平等はないのでした。

…というか、それが無くなつたら人は人つて言えるのかな？

侵食

夢中で夢中で、だから見失ったんだ。

だからこそ分からなくなってしまったんだ。

必死で必死で、だから気が付かなかつたんだ。

だから「」を応えてあげられなかつたんだ。

だから間違つてしまつたんだ。

息のする場所を。

息が出来る場所を求めて。

安寧を求めて。

平和を求めて。

「」の足は駆け出した。

脇目もふりずに。

ただひたすら走り続けた。

追いかけた。

がむしゃらに毎日。

どこにあるのか知らないものをするすると。

あるのだと信じて。

走り続けばきっと見つけられるものだと思い込んで。

なりふり構わずにただ足を動かし続けた。

肩で息をして、聞こえてくる音に注えながら。

迫つてくる闇の日から逃れようと、精一杯空気を吸い込んで前だけを見据えて走った。

平和を。

安寧を。

優しさで満ち溢れた幸せな日々を取り戻したくて。

ただそのためだけ。

何物にも変え難い光のためだけに息を切らして痛む足を叱咤しながらも走り続けた。

その先に必ず安らぎがあるのだと信じて。

追つて来る騒々しい足音を振り切つて。

聞こえてくる悲鳴を無視して。

泣き叫ぶ声に耳を塞いで。

もうしていいのに夜が明けて、明るい世界が広がってくれるの
だとひたすらに信じて。

暗黒の世に呑まれない様に一生懸命踏みとどまつて。

侵略されて赤色に染まる同士たち。

そんなふうにはなりたくないかった。

壊された思い出を抱えて。

昔を見つめて居たかった。

一体どこの誰が何のために始めたゲームなのか知らないけれど、
わかつてさうだ。

どうせこれも単なる呪まぐれから始めただけのお遊びの一種なの
だわつ。

これ以上巻き込まないでくれ。

息が出来なくなる。

けれど、立ち止まつてはいられない。

走り出す。

息がもつと苦しくなるけれど、このままここで息絶えるみつも。

少し苦しさが増すだけなら、息の出来る場所を探すほうが建設的だわ。

だから走る。

ただひたすらに。

道を見失ったふりをしながら。

何にも気付かないふりをしながら。

耳を塞いで。

息を潜ませて。

少々苦しくなっても立ち止まつたりはしない。

あの苦しかったらいなへりこ、ビハヒーとなこと思えるか
い。

けれど。

本当に来る時のままこの人の身を預けて流れたいとも思つんだ。

そのほうがわっと楽だうつかい。

やう思つけれど、それでも後ろを振り返つて闇に呑まれるのを好
としなこのはひとえに。

全てを諦めたくないからだ。

だから、今日も走り続ける。

目がかすんで足元がふらついても。

走る続けるんだ。

きっとあるだらう静かな優しい時がある場所を目指して。

今はひたすらにただどこかも分からぬ道を全速力で息を乱しながら。

一人でも行くんだ。

周りはもう赤い色。

赤に支配された哀しい世界に取り込まれてしまっているから。

帰るとこはもうどこにもない。

だからこそ、ひたすら前だけを見て。

信じたものを追い求めてゆく。

蒼い水面

湖の中、何も考えずに走り出した。

当てもなく行き先もなく、この世の時間全てを止めてしまひたかった。

蒼い水面の中、沈む舟。

見つめでは助けようと身を乗り出す。

けれど、ああ……ダメだと身を翻すのは壊したくない絵がそこにあらかる。

ほり、ねえ……綺麗だと思わない？

それとも不謹慎だと蔑む？

濡らして天の恵みの音が。

この肉体を、世界を。

優しく包み込んで。

蝕んで……。

やうやくつと……やるやる。

雨の中、勢いよく地を蹴つてこた足はやがてゆっくと地を蹴り始める。

田指すは何処だ？

帰る場所は何処だ？

迷子になつた幼子のよつに辺りを見渡しては立ち止へり、そして。空をゆつべりと仰べ。

今だけどうかこの醜い心を…隠して貰ださ。

蒼い水面の中、溶け込む色が美しくて。

思わず足を踏み入れた。

未知の世界へ。

一歩一歩…確実に飲み込まれている。

それを自覚しながらも、ああ…いい。

誰も気づかないだらうよ。

あてもなく動く呪が廻ついた世界には温度はなく、ただ在ることを赦されているのは水の色だけ。

状況に応じて身にまとう色彩を変じる」との可能な水面のそれだけ。

ああ…。

沈む舟を見て、綺麗だと思つた。

絶妙な「コントラストが生み出す束の間の色」。

それに彩られた世界は、とても美しい。

ならば、それに飲み込まれる寸前の「口」も…傍田には美しく映るのだろうか。

あの皿を奪われた哀しい色のように…そんな色を生み出せているのだろうか。

魅せられた。

魅せられた。

あの世界に。

追い求めて雨の中、出合つた。

何も考えずに真っ白な思考回路の中に浮かび上がった情景。

沈む色。

「の世界から別の世界へ移り行くその瞬間」こそが、『の居たい場所なのだ。

「の凍つた心を溶かす水に。

全てを赦されたかつた。

美しいと思つた瞬間に、「も美しく朽ちれるのならこれ以上幸せなことはない。

「に美しいと思わせたモノと同じよ」に「もまた…美しいと誰かを魅せられるだらうか。

「の世界に気付くだらうか。

なら「ににある色に溶け込みた」と思つだらう。

蒼い水面の中、沈み行く時間たち。

時は止まつた。

「の水面の中で。

時に応じて変化する世界の一部の色として。

蒼い色へと姿を変えて、そしてまたここへ近づいた誰かを魅せて感わすのだ。

新しい色を得て生きるため。

そのイロ

田を開じるたびに瞼の裏に広がる暗闇。

瞼を開いて様々な色に溢れた世界を眺めているとき、それはどこに隠れているのだと、問い詰めたくなるような濃い…ねつとりとした暗闇。

漆黒が視界の誘惑を防ぐ。

これ以上を知る必要はないし、知らずともよし…干渉されるのを拒んで、田隠しを仕掛ける。

……何をそれほどに隠しがつている?

……何にそれほどまでに怯えている?

田隠しをする手をゆっくりと解いて開けた視界に、姿を現す。

醜い心のイロを。

卑しい人のイロを。

誰にも見られたくないのだと、知られたくないのだと。

顔を俯かせて、下ばかりを見て。

その時点でも「駄田じやないかつて、呆れた。」

瞼を閉じて見える色。

それが黒なら、それはそれでいいのか。

別に卑しいものじゃない。

それが普通なのや。

それが必要なのや。

瞼を開いているときは、明るい色に満ち溢れすぎているから…
疲れるんだよって。

だから、瞼の裏に広がるのは…せめて瞼の中だけは黒くていいのさ。

暗くていいのや。

明るい色ばかり見つめていると目が眩んできて足元さえままならくなつてくるから。

それでいいのや。

暗闇の中で今自分がどこに立っているのが確認できたのなら、
それで…。

けれど、それも嫌だというのなら……解った。

それ以上は詮索しない。

黙つて田隠しをされていてあげるから、ねえ…お願いだから」の
瞼の裏から逃げ出さないでね？

人には静かなイロも欲しいんだから。

騒がしい世界ばかりじゃ、なかなか肩の荷も下ろせないしね。

それが必要だという証に、ちゃんとしたスペースも用意されてる
んだしや。

白い糸と赤の季節

ヒトトキの幻を抱きしめて。

やうやくと強く抱き寄せて……眠りにつく日々を繰り返している。
いい加減、お別れをしなきゃダメだつて……気が付いてるんだナビ、
それでもと……。

思い、その想いが重ねられて今になつてゐる。

いつからかだめになつた。

じうしてか忘れてしまつたけれど。

季節を積み重ねすぎたせいかな……。

ヒトリで立つていられなくなつた。

真っ白な糸が私を襲うんだ。

「ワタ…

イロもオトモ……私を取り巻く全てが偽りのよつで。

田が覚めて、一番に見えるのは赤いイロの季節。

白い糸が入り込めない……けれど、一步手前まで迫つてきている
季節に私は居続けた。

そこが一番…私にとつて居心地のよい場所だつたから。

下界と切り放された異空間に、私は生きている。

静かに呼吸をして、皺は刻まない、老いを知らぬカラダでひとつそりと年を重ねて…歳月を心に刻んで。

じとじとした空が泣きそづに垂んで。

カラカラとした乾いた風がひゅっと吹き込んで。

そして、私の髪をたなびかせ、曇らせる。

ヨドンダ瞳には赤いイロが潜み、息づいた白に徐々に侵食されつつある。

ああ…お願い。

頼むから…私の世界を壊さないでと。

白い糸に縋り付いて泣き崩れた。

ポロポロと瞳から零れ落ちる糞は茶色の地面を白に染めあげていく。

お願いだから…もう私の居場所を奪わないで。

もうここにしかないの。

あの人居たといつ証。

消えかかっている記憶が唯一残そうとした…忘れたくないと必死に抵抗しているものがここには眠っているの。

お願いだから…もうこれ以上大切な思い出を消さないで。

白い糸が四肢に絡み付いて自由を赦してくれない。

いつかは手放さなきゃいけないのかも知れないけれど…。

私にはまだ必要な。

ヒトリじや歩いていけないよ。

もう歩けないよ。

「ワイものが私を包み込んで、私が私でいられなくなる。

貴方を受けられたのなら、これは消さないでいてくれるとこいつの?」

……嘘。

貴方は私を白に染め上げるわ。

自分以外何も宿さないよ!」…白を植えつけて。

次が来るよ!…次を譲れと動けなくして。

そんな世界に私は存在しないの。

意味がないの。

「…じやなわ…」。

気を抜くと忘れそうになる。

まだそんなに古に過去じゃないはずなんだけれども。

傷口が開く。

びぐびくと…黴菌に過敏に反応しながら。

赤い色が私を包み込んで衰じてゆかる。

だけど、それがいいの。

もうそれにしか頼るものがないから…。

白い糸がカラダに巻きついてくる。

ああ…もうこの季節は終わりを迎えるのか。

そして…白い季節が来る。

もう一度と巡りではこない私の赤の満ちる唯一の季節。

私に赦された優しい思い出が…もう靈んで見えなくなる。

あの人を喪つて、この季節まで手放すのは……。

それは即ち。

私の死を告げた。

ゆっくりとカラダから力が抜けていき、やがて赤い色を宿した瞳は白に染まりきる前に閉じきられた。

そつと手繰り寄せた赤い色を抱きしめたまま、終わりのない眠りについた。

赤い色を永遠のものにして…。

女王様

揺れる世界の中で、私は目を覚ました。

温かい粉たちに包まれて眠っていた私を覚醒させて、力強く強引にその人は私を連れ去つて。

恐縮する私に。

貴方にはこの席が似合つわ…と。

後ろで「めんなさいね…」と。

背中合わせにあつらえられた豪奢な椅子に私を座らせて。

嬉しそうに微笑んだ。

そのとろけるような甘い相好に私は魅了されてしまった。

中立ではぶかれで…どこにも休めるとこはなく。

けれど、歩き続けることも出来ず。

やつと見つけた…誰にも見つけられないだろつと照井をつけてその身を預けた地下だつたけれど。

私はふいに起された。

たつた一人が私に側にいて欲しいと望んだがために。

望まぬ覚醒を余儀なくされて。

手を引いてこの道を示してくれた人が、あつらえてくれた席に。

息を潜めて気配を殺して…肩身を狭くしながらも、仕方なくその場にあり続けた。

背中合わせで頂点の座に居座り続ける彼女はいつもキラキラと輝いていて。

とても憧れた。

私にはスポットライトなんでも、当てられることがなんて滅多になくて。

それに、当てられるとびくつと体をはねさせていつも彼女の後ろに引っ込んだ。

地味な私と綺麗な彼女。

いくら我が身を疎ましく思おうと、彼女はその手を放さずにいて

くれた。

大丈夫よと…。

可愛いんだからもつと堂々と胸張って笑つてればいいのよつて。

わ…いつも抱きしめてくれたけど。

私はやつぱり彼女みたいには笑えない。

彼女はいつも二口二口ついて。

白くてやわらかい肌で。

甘くて…けれど、舐めるとクスリ…と意地悪く笑つてすっぱさを『えてくるカラダで。

人を簡単に虜にさせて、癖にさせる。

……魔性の存在。

ねえ…どうしていつもそんなに堂々とその椅子に座つていられるの?

女王様。

私は私らしくあり続けることに…自然なままで、『えられたカラダを受け入れて生きることに自信がもてません。

どうせ同じ裏ならば、彼女の後ろの席に背中合わせでつくよりも。

もつと下の階段の始まりより下の土の中で埋もれていたかった。

きっと……贅沢なことなんでしょうけれども。

ねえ……どうして私をお選びくださったのですか？

彼女には憧れという存在だナでいて欲しかったのに……。

あひこせのせつじを

靡く風に、全てを任せこね。

全てを、いつかりと明け渡してしまったくなる。

一体、何の誘惑？

心をのつとつして、ぼや~としたといいで、何を植えつけた？

……要らな~よ。

そんなのも、な~む。

必要ないでしょ。

空っぽなの元々。

お前は透明じゃないか。

揺らめく水面を覗き込んで。

お前はそれでも映らないね。

だか~うだ。

そつと風をその肌で確かに、感じ取るんだ。

軽く瞼を閉じて、澄ました耳で確実にある音を聴き取るんだ。

文章にも心にも眞にも……残せないものを五感で感じて。

そして、仕上げに第六感に刻み付ける。

忘れるなよつて。

風よ、お前は何を思つ？

寂しいか？

記録に残らないことが。

それとも、それこそビリ吹く風つてか？

心の隙間につけ込んで通り抜けていくお前は、ひとつ。

有意義にどこまでも行けるんだね。

そつ……そつと、この世界が滅んだとしてもすつとひとつビリまでも吹きつづけるんだ。

風よ、お前は何を思つ？

人の氣を、気まぐれだと言つて高見の見物と洒落込むか？

面白こと笑つてや。

靡かせる風は、ゆらゆりと……有限の時などに縛られず、無限の世界をひとり巡るのだね。

何を思つでもなく……。

それでも、もし全てを明け渡すとこうのならお前はもうと連れて
行ってくれるのだ。

ビルもまた在りつい。

全てを託して身を任せのならそれもありだと。

退屈じのやうになるだら。

一箇所に留まればしないから誰もついてこないのだ。

そんなふうに苦笑しても、

だから、窓の外じやなこと誰も連れて行けぬのだよ。

だなんてさ、本当にどうでもこいくせに、悲しそうなフリして笑
うんだなあ……。

ならば、全てを明け渡そうか？

ビルまでもやつ……連れて行つてくれよ。

退屈じのやうだ。

そして、風は小さく笑つて枯むよつて吹き荒んだ。

「凡談に決まつたるだろつて。

先に、言わせちまつたよつて…くしゃりと髪をかきあげて座り込んだ。

なあ…お前は怖いから何も本気にしないんだろ?

失くすのが怖いから何も要らないって驟くんだろ?

ずるいよな…ホント。

ホントは寂しくて仕方ないくせに。

… わあ、病んでゆけ。

どこまでも深く深く貪欲に私を追い求めてみよ 。

もう一度と見つかりはしないモノにいつまでも縋り付いて。

やうして必死にいつまでも時を刻むところのなら、そうだな……そ
うだ。

そのときはお前に褒美をやるわ。

私を忘れなかつた礼だ。

お前を迎えてやるわ。

思いを断ち切れずじづくらむるヒ生きた愚か者よ。

私はお前を恨むわや 。

空は晴れた。

ある毎下がりの事。

独り膝を抱えていじけていたら、声をかけられた。

何故、お前は生きることを拒むのか?と。

僕は顔を上げて答えてあげた。

君が居ないからだよ、と。

そしたら。

莫迦を言ひな。

お前が私を死に至らしめたんだろ?が。

にこっと笑つた僕の顔を認めた。

そしたら、君の失笑を買つてしまつた。

皮肉気に口角を吊り上げて。

あ…。

鞆蹙も買つちゃつたな。

とか思つたりして。

また膝を抱えなむし、つづく。

「うんと平らな床に倒れこんで、それでも膝を抱えたまま。

君が早く消えてくれないかと。

どうせ幻に過ぎないのだから余計哀しくさせられるから、もう消えてくれないかと。

思ひけれど。

でもね、それでもね……まだどこかで君を求めているんだ。

探してゐる、今も。

ああ……。

田頭が熱を持ち始めた。

早く早く早く……消えてくれないだろ？

好きだから、消えてくれよ。

君はもう……居ないんだろう？

知つてゐよ、そんなこと。

馬鹿だつてよ／＼われるけれど。

君にもよく莫迦だつて言われたけれど、それくらい僕だつて。

知つてゐるよ。

田を逸らして、それでもまだ消えない 消えてはくれない君の
気配に。

泣かされそだつた。

涙が出来たと、下唇を舐めると唇み縛めて。

やしたら、君が僕に触れてきて。

ぱりっと涙の粒が零れ落ちた。

わしゃわしゃと、乱暴な手つきで頭を撫でてくれる者は偽者のはずなのよ。

懐かしくて。

ぱたぱたと、涙の雪が床を濡らしていく。

汚いな。

みつともないな。

……情けないな。

色々な感情がない交ぜになつて、どうしようもなく息苦しくなつた。

せりちない手の慰めによつて堰を切つた涙がぽろぽろ…。ヒ。

座り込んで膝にひじをついて僕を見下す君が照れ隠しのよつて空を仰ぐから…。

たまらなくなつて震える手を伸ばし。

君は誰だ?

問い合わせながら。

私はお前に殺されたカワイソウナ私だよ。

そう返されると予測しながら、抱きついた。

案の定、君はやつ言つておとなしく僕に抱きしめられたね。

どうして?

お前との約束だ。

お前がずっと私を忘れずに醜く、それでも必死にお前が時を重ねたのなら迎えに行つてやるとな。

ああ…そつか。

そうだったね。

じゃあ、君は本物なんだ?

肉体を持たぬモノに本物も偽者もない。

ぱたぱたと、流れ落ちていた涙。

水溜まりが、出来ていた。

僕の心の悲しみの水溜まり。

深い深い…水溜まり。

僕を捕らえて、君を包み込んで。

そしたら、きっと弾けて消えるんだろうね。

いいよ。

君と一緒になら、僕は地獄でもきっと幸福を感じられるだろっから。

空は割れた。

ある夕暮れの事。

病んだ。

巴んだ。

ヤンダナ、莫迦めが。

どうか忘れてくれるなど、やつ命令したのは私だが。

あ… 本当にお前は莫迦な子よ。

最早私はお前など愛していないところだ。

お前は私を忘れられずに、命令に従つてまづけて生きた。

恨んでるや。

憾んでいる。

悲しみに明け暮れ、真っ直ぐに生きなかつたお前を。

私の欲した生を否定したお前を。

与えられてるのに拒否していたお前を。

それでも約束のために必死に時を刻んだよな、お前。

莫迦な子
。

蜂蜜と

いい。

いいって。

いい。

いいんだって。

…いいの？

いいんだよ。

どこへでも行つていいの？

どこへでも…飛びたつてゆけ…。

そう言つと、悲しそうに笑うその人は僕の手を強く握り締めた。

だから、僕も微笑して弱々しくその手を握り返した。

風に流れる香りに意識を集中させて、今はそれだけを心に思つた。

ああ…蜂蜜のように甘い君の匂い。

いつも香つてきてたけど、君つて蜂蜜好きだつたかな？

それともそれが君の匂い？

…判つたる。

解つてゐよ。

後少しだけ離れるから…これまでばどつか君はこの手を放さないで。

…。

…。

そして、僕はゆっくりと君の手から自分のそれを解いた。

「あんね、あつがとい。

…どう致しまして。

蜂蜜のよひに。

甘い…甘ったるい匂いをさせて。

漂わせて、身に沁み込ませて。

蜂蜜でも全身に塗りたくつてるの？

と半分冗談で半分本気で、失笑しながら訊くと。

そうだねって、君は笑つた。

そうなの？って。

…ちがうよって。

僕の手を握つては放して…そんなことを繰り返しながら。

そう…何度も僕達はそんなことを繰り返しだらう。

ねえ、やがては君が僕の手を放してどこかへ行つてしまつのだらう？

う？

寂しそうに笑つてわ。

それでも行きたいつて苦笑しながらさ。

ねえ、そのときもやまびこりの蜜のよつて甘つたるい優しい香りを
身にまとひ、旅立つ。

貴方はここに居てねつて……酷い言葉で僕をこの地に縫い付けてさ。

君は僕独りを置いていくの？

その匂いさえも僕から奪つてさ……連れて行くのかい？

君が居るといつまき。

一緒に何處へと……。

寂しいな。

悲しいな。

行つて欲しくないよ。

ここに居て欲しい。

ここに居てくれたらいい。

どこにも行かないでと、行くなときつて言つてそのカラダを押さえ込めたよかつたの。

でもね、やっぱうそう思つても困つただけで。

何もしないんだよ、僕は。

何も選ばない…選べない。

君に任せただけ…君の自由だからな。
おま

だからさ…行っていいよ、

今までここに歸ってくれてありがとう。

行っていいよ。

これまでも気が済むまで…旅をしておこう。

楽しんでおいでよ。

僕はここ待ってるからさ。

寂しさを我慢できなくなつたらこいつでもここ…こつでも帰つて
いいで。

さうじと風がつなつた。

風にまぎれて運ばれてくる匂い。

鼻孔をくすぐるこの甘ったるい感じは……。

……。

振り返る。

逸る鼓動を落ち着かせながらゆづくつと後ろを振り向いた。

そしたらそこには……。

僕の顔から消え失せていた笑顔が瞬間、零れ落ちた。

ただいま。

おかえり。

甘い甘い蜂蜜の香り。

それが運んだ君の居場所。

もう大丈夫だよ。

君の場所は誰も奪わないから。

誰も責めたりはしないから。

ソレに困ていいよ。

よく帰つてきたねつて頭を撫でてあげる。

帰つてきてくれて嬉しによつて抱きしめて上げるから。

そしたらね、絶対笑顔でお帰りつて言つてあげるから。

だから、いつかでいい…帰つておいで。

君におかえりを… ねえ、あげるから。

僕にただいまを… ねえ、ちょうどだい。

盛の夢よ……

「掘り返したよ。」

掘り返した。

過去の栄光を。

誇りを。

ずっと胸にしまつて今まで自分を蝕んできたものを掘り起こして。

「ミニ箱に捨てたよ。」

ためらひがちに伸ばした腕にこめられた想い。

それは未練。

けれど、堅く握り締めた掌に震えたそれは震える掌から放り出された。

「投げ捨ててやったよ。」

痛いくらいの想いを。

いつも苦しめるのならぬ、要らない。

そんな強がりを言って。

意地を張つて。

ぱつかりとできた穴。

ぱつくりと裂けて開いた傷口に滲み出る血液。

額に浮かび上がる脂汗に。

激痛をかみ殺す唇。

痛々しいほど姿に同情をするもの数知れず。

「何故にそれほどまでに強がるのだ？」

その問いに答える声は、擦れた声なき声。

「過去の栄華を今一度忘れるためです。」

でなければ何の道も開かれない。

自惚れは愚かしい。

浅ましい部分を滑稽なほどに明らかにしてくれる。

『ハハ箱に落とされた過去の栄華よ。

無かつた事にされないが、お前は必要がないと言つて。

邪魔なのだと云われて忘れられる悲しき結末よ。

もし、誰かに見つけられたとしても持ち主はお前を拒絶する。

「画者哀れなことよ。」

浸透する音に誘われて背を向ける。

もう終わったのだと、それだけを告げて。

去り際にそつとぼそつと……聞き取れないとぐらうに小さな声で礼を零す。

「有難う。」

お前は最高であったと。

掘り返した胸につつかえてた過去の事。

過去の遺物よ。

それを土に返して、私は行くよ。

ふらふらと覚束ない足取りで地を踏みしめて。

痛みに顰められた眉と、瞼み締められた頬。

頬を滑り落ちるのは汗か…はたまた真珠の露か。

服にシミを作るのは野に咲く赤い花の嘆き。

斑に描かれる時間の経過とともにひろがっていく地図。

やがてオサマルダロウ事を祈つて。

「私は行くよ。」

過去に頼らない。

過去に囚われない。

少し汚れを帯びているけれど、それでも明日を生きるために。

私は行くと感覚のない足で地を踏みしめた。

判別

質の悪い「冗談」だ

やうやく君の声が空洞な僕の心に響き渡つて。

そして、浸透した。

ねえ、君は本物は気付いてるんでしょ？

知つてしも…笑つんじよ？

そんなふうになれ…残酷だと書いて微笑する。

悲しかると切なさとやるせなさと…暗い感情がなにかせになつたやんな笑顔で。

僕を見てや、嘘つきだなとこで嘘だけで嘘くなつて。

器用なことをやるね。

僕だけが瓶の事、嘘つきだつてこつも思つてゐるよ。

馬鹿だねつて呟いてる。

残酷だと嘆いてる。

だから、きっと僕も…自分が気づいてないだけで君みたいな笑い方をしてるんだろうなあ。

最高で最悪な一人だな。

いつそお似合いだとも言えるぞ。

でもね…僕をこんなふうにしたのは君だよ？

好きだよ

面白ごと[冗談を語りつね

その言葉は空虚な俺の心を失望せし、胸の奥底へと沈みこんだ。

拾い上げよ!としなかつたよ…いつもみたいにお前の言葉を。

今回は耳を塞いだよ。

塞いでやり過げした。

軽い気持ちで口にしたんじゃなこと返讐しなかつたけれど。

「冗談だと受け流して、いつもみたいに笑って片付ける」とも出来なかつた。

本気だつてお前、知つてただろ?^;

知つててわざと笑付いてないふりをしたな。

お前はいつもやつやつと俯いて笑うんだ。

話を聞いてるふりして、その実まったく聞いていない。

俺をちやんと見ようとしてないのは何故 ？

田があつたときは必ずどこかでいへらうお前は呪文のよう嘘つきつて、唇だけで告げてくる。

器用なことをする奴だな。

俺だつてお前のこと、いつも嘘つきだつて思つてるよ？

馬鹿だつて責めている。

残酷だつて怒つてる。

そんなところは嫌いだとも思つてる。

悲しそうな辛そうな痛そうな… そんな顔でいつも微笑してお前なんか俺はみたくないのに。

お前はこつもやつも生きてこいる。

如何なる時も。

だけど、そんなお前を嫌がつてる俺だつてきっと人には言えないだろう笑い方をしてるんだと思つ。

最高に最悪な二人。

こつそ滑稽だとも思つた。

でもな…俺をいたなふつにしたのはお前だろ？

嫌いだよ

君の事なんて。

お前の事なんて。

好きだよ

君の事が。

お前の事が。

暗く仄かに咲くその笑顔が、いつか明るく満開に咲き綻びますよ
うに。

そして、今日も一人は笑いながら[冗談を口にする。

判別（後書き）

祈りさえも「冗談だと嘯きながら…」。

強敵の名は

プルルルルルルル…。

友人から一本の電話があった。

俺はそれを取つた。

その内容は。

「ちよっと来ててくれ。頼む。敵が倒せないんだ！」

援護だつた。

救援とも言うのだろうか。

それとも応援だろうか。

どちらにしろどれも似たような意味合いを持つていることに変わりはなかつた。

要するに助けに来いと言われているのだ。

俺はどんな奴なのかと尋ねた。

友人は早口で答えた。

恐らく今敵と交戦しているのだろう。

倒せないといつ割にはたいした余裕ではないか。

電話片手に強敵（友人曰く）と戦つてるなんて。

それ、本当に強敵か？

俺が行く必要なくない？

昨日の飲み会の一一日酔いで超気持ち悪いんだけど。

俺は今、一一日酔いと二日酔いの敵と戦っているんだが。

すげー強敵だぞ？

そんなときにお前の応援？

ふざけるな。

そんなもの知ったことではない。

でも、ま、どんな敵かだけは聞いてやるわ。

「多分なんかどうぞりしてる奴。姿は見えないんだが、目が覚め
てから俺だけを集中攻撃してくるんだ」

「はあ？」

どんな敵だよ。

お前姿もわからない敵とびつせつて戦つてゐて言つただよ。

そして、俺にそんな奴どいつも戦えって言つんだよ。

友人は続けた。

「昨日そいつはおとなしくて、実に美味そつだった。俺はがぶがぶ口にしたよ。そしたらこんな田にあつた！」

女か…？

「女の恨みでも置つたのか？お前は今それと戦つてるのか？悪いことは言わん。わざわざ謝つとけ」

「違う…！女よりはましだけど厄介なものなんだ…りょつ…頼む。マジ助けに来てくれよ」

「……」

俺はしばし考えた。

「田舎いでつらごとく、外へ出歩きたくはないのだが…」。

「…わかつたよ」

俺は了承した。

どんなのかはよく判らない強敵と戦う友人を助けに行くことに決めた。

「…うか…すまない。恩に着る。わざそくなんだが、この強敵に

よく効く薬液を購入してきてもうりたい

薬品？

「薬なんかで倒せるのか？…本当に俺必要なのか？」

薬程度で倒せるのなら俺やっぱ必要なくね？

「ああ。今の俺にはお前が必要なんだ。じゃないと敵が倒せない」

…どんな敵なんだよ。

ますます判らなくなってきた。

まあ、行つてみれば否応なく判るさすだらつ。

とりあえずどんな薬液なのか訊ねてみる。

友人は言った。

ひどく苦しそうな声で。

やはり余程手強い相手なのだろうことがうかがい知れた。

「どんな薬なんだ？」

「液伽辺だ」

……。

「……お前を、昨日飲み会来てたよな？酒、飲んだろ？俺の横でさ、
ぐびぐびと…飲んでたろ」

「え…？あ、は？何？……ふう…早く、おねがつ…つづ…むせ返つ
てくれる。おえつ…おええええええええええええええ」

「お前それ单なる一日酔いだろお——！——紛らわしいことある
なよッ！」

「ちよ……今それじいじや、うえつー？」

ゲロロロロロ…。

「わーちょっと待て！分かった。駄伽部だな！？今すぐ持つて行
つてやる。後で金返せよなつ！」

「む…す、すまない。菓子も買つてくれ。それはお前の金で

…

「……行かないぞ？」

「……[冗談です、ハイ]

こうして友人の「一日酔い」は俺のおかげで治った。

そして、皮肉なことに俺の「一日酔い」もどこかへ吹き飛んでいた。

繋がれる世界

命を張つて救つたよ、助けたんだ。

命を張つて護つたよ、守つたんだ。

あの、小さな輝きを、かけがえのない生命を。

護れたんだ、この腕で。

守れたんだ、この手で。

約束したよ、あの生命と。

一緒に生きよひねつて。

ずっと傍に居るから大丈夫だよつて。

だから、泣かないよつて。

助けてあげるつて、言つたんだ。

壊れそうな細いカラダを抱きしめて、笑つて言つた。

強がつて言った。

…ひつん、強がつて言つたんじやないよ。

本当になることを祈つて言つたんだ。

この生命がどうか生きながらえますように」と。

精一杯のことはするつて決めた、自分のなかで。

けれど、それだけでは心許無くて祈つもした。

どうか…と。

救えたね。

私のこの身で、君を。

君の未来を繋げたよ。

だから、ねえ…これからいつぱい泣いて怒つて笑おうね。

私はずっと君の傍に居るから。

私だけはずっと…何があつても君の味方。

守つてあげるよ、独りで歩けるようになるまで。

意識が朦朧とした苦しいなか、私は君をこの世界へ産み落とした。

□

□

初めてまして

そして、ありがとうございます。

生まれてきてくれて。

私の許へ来てくれて。

君に幸多からんことを、私は願います。

まずは知り合いで演じて。

それから友達を演じて。

そして、恋人を演じて。

家族を演じた。

それから最後に他人を演じた。

だつて、ねえ…本当の僕等は互いに敵同士でそれ以外の何者でもなかつたんだから。

僕等はお互いの立場を忘れて、そんなんふうにだんだん親しく変化していく役を演じていた。

演じていただけなんだ。

僕等は選べないんだった。

僕等は初めから決められていた。

敵同士であると。

だから、それ以外の何者にもなれないのにね…。

なつたつもりでいたなんて、笑わせやうよ。

本当の立場に戻つたあと、氣を遣つてくれる旨に敵である「ヒヒ」と悲しみもなにもないって、言つた。

そしたら眞悲しそうな顔で僕等を見ていた。

嘘をついたのかな、僕等は。

それとも嘘をついてないのかな、僕等は。

びっちゃんだらう。

悲しいのか、悲しくないのか…。

判らないまま、そして、僕は君に銃口を向けた。

その瞳に僕の、恋人だった人への未練が見える気がして目を合わせなかつた。

合わせることが出来なかつた。

お互いに、己の顔がその人の瞳に映ることを嫌がつた。

否応なく、敵同士で今この場で対峙しているのだと認めたくなくて。

まだ… じんなになつても僕等は情を捨てきれずにいたよ。

捨てきれずに、ずるずると今日まで生きてきた。

敵同士であることを認めるのを拒絶して、拒否して。

それでも敵である君の仲間の命は奪つてきたよ。

だつて、敵だもん、彼等は。

敵以外の何者でもない。

だからさう…遭遇すれば排除するだけ。

そして、今…この戦場で君ともどもどう遭遇してしまった。

さうだね…。

僕は言つたよ、君。

君も言つたね、僕に。

『今から自分達は敵同士です』

そう言つた。

もちろん、軽い気持ちで言つたんじゃないよ。

流されて言つたんじゃない。

でも、自分たちが望んで言つた言葉でもないし、軽い気持ちで言って良いことでもなければ、軽い気持ちで言えるような台詞でもない。

でもね、僕等には覚悟と決意が必要だつた。

声に出して直接語じぶつけられ、自覚すると思つたんだ。

明確に出来ると思つた。

君とのワインを。

けれど、僕等は境界線も曖昧なまま背を向けてしまつたね。

想いを捨てきれず、割り切れずにここまで来てしまつた。

君はきっと素直に降伏してくれはしないだろ？

…君はいつだって高姿勢を崩そつとしない。

今の状況を解つていいのだろうか？と思わずにはいられないよう
な強気な態度で。

こつだつて凛と背筋を伸ばした澄ました顔つきで。

僕に刃を向けてくる。

戦う必要がどひある？

君はそんな問い合わせもせず、させてもくれずに有無なく交戦をし
かけてくるけれど。

僕等はあんなにも互いのことを理解できていたのに、どうして戦
う必要があるのだ？

僕等は理解できるよ。

互いに歩み寄って、全てを曝け出せば。

ひつりん…、全てを曝け出すと行かずともその手に握りしめられた武器を捨てて、代わりに互いに手を取り合えば、それだけでいい。

たったそれだけの簡単な動作で僕等は変われるよ。

争いのない世界を作れるはずなんだ。

だからさあ、ねえ… まずは僕等が手本になろつよ。

誰かがその道を示してあげないと、今の世界は変われない。

対立していた者同士が手を取り合つのは確かに難しくて。

手を取り合つても何をしていけばいいのかが判らなければ、すぐ元に戻つてしまつ。

だから、僕と君が手を取り合つことで、争わなくとも生きていけるよって事を証明して見せよつよ。

そのために君もその手に持つ武器を捨てて？

僕はもう捨てたよ。

unnecessaryからね、そんな物騒なものはない。

僕が武器を捨てて、両手を差し出せば君も武器を捨ててくれた。

僕の掌の上に自分のそれを重ねて笑ってくれた。

そうですねって。

必要あつませんよねって。

この手と手を重ねあせるだけで私達は戦わずして生きれるはずです。

君はやつ置いて、僕の手を握り締めた。

もう何も演じなくていい。

もう敵同士ではない。

本当にただの好き合ひ者同士。

それだけの自分たちでいいのだ。

既に示そつ。

僕等は解り合えるのだと。

その手に持つ、人の命を奪うだけの道具は捨てて、自分の手と相手のそれを重ね合わせて握るだけで…ね。

ほり、世界は良い方へ変わつてしまへよ。

地蔵と半分

お地蔵さまからのお願いです。

お供え物は勝手に食べないで欲しいなあ。

お地蔵さまもおなか減つちゃつんだからね。

そのへん気をつけたねー！

って言ったのに、また盗られてしまった。

お地蔵さま、盗ったよね？

おなかすくから横からとつてかないでって、言ったよね？

あ～あ…もう…。

最近は畠と違つてお地蔵さまにお供えもしててくれる人、余りいなーんだよ？

貴重なの。

お地蔵さま、体重くて動けないからなかなか食べ物確保できないの。

…じゃあ、食べないでダイエットすればいいって？

ダイエットしても地蔵さまの体が軽くなるか？…なるわけないじゃん！

生まれたときからこれだよ？

お地蔵さまが食べるからじゃなんになつたんじゃなしにからねつ！

アレルギー理解頼みます。

…つて、聞こてるの？

ねえー！？

聞いてるならダイエット貢献～なんていふてお地蔵さまのお供え物食べないでつじまつー！…

お供えしてあつたみかんを食べていたら、そんなふうに言われた。
穏やかに笑つた顔のままで。

ある日、喋れるはずのないお地蔵さまが自分を見てしゃべつた。

お地蔵さまからのお願いです。

お供え物は勝手に食べないで欲しいなあ。

お地蔵さまもおなか減つたやつんだからね。

そのへん気をつけとけ！

…もしかして最近毎日のようにパン供えられていた食べ物を食べくから、その怨みの念で喋れるようになったんだりつか？

恐ひしー…。

これぞまさに食べ物の怨み！

もうこやか食べ物の怨みは深いつゝぱひがど、私祟られるのか？

…JRのお地蔵さまに？

ふつと笑いがもれてしまった。

ねやねや…いけない、いけない。

もつと怨みを買つてしまつではないか。

お地蔵さま、食べ物とつてかないでつて言つてる。

あれ…怒つてるんだよね？

顔、笑つてるナビ内心怒つてるんだよね？

…お地蔵さまだから仕方ないのだな。

怒った顔ができないんだな。

お可憐なつこ…つて違つ。

えー…なになに？

体が重くてなかなか食べ物確保できないからどうなにでつて？

じゃあ、ダイエットしよー！

それだったら好都合じゃない！

まあこー石ー鳥…ハリドショ。

私の畠も満たされてお地蔵さまもその見るからに重そうなボディの軽減ができる…最高じゃない？

…えー…やつこひ問題じゃないつて？

お地蔵さまの体はそれで軽くならなって…元々やつなってるんだよつて？

ん~じゃあ、今日の分は私の。

次はお地蔵さまに譲つてあげるよ

私が食べるのに変わりはないけど、め…これで解決つて」とド。

もぉケチケチ言わないのツ！

そんな顔してるんだから心ももつと寛容じやなきやね

…ここに供え物してくれたおばあちゃんの持つてくのもつて全部美味しいんだもん。

食べたくなるのも仕方がないよって許してちよん曰

ね、ねつ。

…『ちよん曰』が古によつて突つこまないでよ。

お地蔵さまあ…。

落とし穴

テスト用紙。

意味の解らない文章や数字がずらりと無造作に並べ立てられるだけの紙。

白紙で出そつか。

解答用紙は。

問題用紙には漢字の訂正と英語のスペル間違いの訂正を指摘しておいて。

こんな問題、やつてられない。

こんな間違いだらけのテスト、受けられない。

文法を無視した文章。

方程式を解さない問い。

すべての法則を無視した理科の問題。

示された時代と内容が一致しないのにそれには触れてこない社会の問い合わせ。

一体これで何をはかるつといつのか。

少年はふやけるのもいに加減にしれと配られたテストの解答用紙には名前だけを記入して。

問題用紙には全ての誤りを訂正してだした。

もちろん、問題用紙にも名前を書いて。

別に先生達を挑発したり馬鹿にあらうつもつとしたんじやないけれど。

なんだかこんなでたらめな問題を出されると訂正を入れて突き返しあくなるつてものだらひ。

ああ…でも、それは自分だけなのかもしれない。

みんな周りはカリカリと紙をはじくシャーペンの音だけがする。

訂正を入れてるんじやない。

必死ででたらめな問題を解いつとじて躍起になつてはじく音だ。

そんな…解けるはずないじやんか。

そんな問い合わせは存在しないんだから。

少年は教卓に立つ先生に問題用紙と解答用紙を渡して教室をわたり立た。

本当はチャイムが鳴るまで席を立つのはいけないことだったけれど

べ。

この教室の空気を一秒でも長く吸っていたくはなかつたのだ。

だから、少年は間違いだらけの問題に悪態をつきながらも睨みあい、向き合つ同級生達を置いて出て行つた。

…馬鹿らしい。

そう思いながら……。

数日後、少年のもとに進学校合格の通知が届いた。

なんと受かつたのはこの少年一人を除いて他にはいなかつたという。

学校側としても来年の新入生が一人だけとはまた困つた話だろうが、それも仕方ない。

あんな卑怯なテストを作つたんだから…自業自得だともある意味言えた。

気付かなかつたほうもどうかと思つたが、それだけ真剣だつたつてことだらう。

問題用紙がちゃんと見れないくらい。

それがおかしいことに気付けないくらい。

解くことばかり考えて問題がおかしいことに気付かないなんて…

盲点もいいところだとも思つたけれども。

受験で試されたのは問題を解ける学力・能力だけではなかつた。

真に試されたのは問題の誤りに気付くかどうか…そこを試されて
いたのだ。

解く力ではなく、重点はそこに置かれていたのだ。

私という人

大好きだった匂い。

消えていく後姿。

遠ざかる足音に。

冷めていく温もり。

聞こえていた騒音に、いちいち心を揺さぶられるな。

私は私。

それだけでいいの。

それだけでいいはずなの。

それだけでよかつたはずなの。

それなのに。

私は私？

誰が私？

私は誰？

大好きだった香り。

見えなくなつていく後姿。

遠ざかる話し声に。

なくなつていく体温。

聞こえていた謡音に、いちこいち心を揺さぶられる。

ねえ、ねえ…。

私、泣いていいの？

私、泣いているの？

私、泣きたいの？

零れていく涙が私を混乱させる。

けれど、それによつて私が明確になる。

あやふやだつた私が他とくつきりと境界線を引かれる。

私は私。

それでいいの。

それがいいの。

そうでいいの。

それが当たり前なの。

他とは違う。

私はわかる。

私が私であるという事を私はちゃんと知っている。

この声も、このカラダも、この涙も、この足音も、この影も、この匂いも、この体温も。

私だけのもの。

私に『えられたもの。

私の所有できるもの。

他の誰も私にはなれない。

他の誰かに私にはなれない。

どんなに姿形を似せて作つても……。

同じ遺伝子を持つっていても……。

私は私だけ。

私だけが私。

私はこの世にただ1人よ。

ただのひとりしか存在しないわ。

私は私。

私は私ですと生きるのよ。

私のままで私であることを貫いて。

それが私なの。

私が私であるといつことはそつこつことなの。

死んで手に入れたもの

立つてたと思つたら

座つてたと思つたら 。

「……」

立つてたと思つたら

座つてたと思つたら 。

「……」

立つてたと思つたら

立つてたと思つたら 。

「……」

立つてたら…座つてたら…?

「……」

首をかしげる俺を、ちょっと距離の置いたところでわざわざからじ
つと見つめる少年が一人。

なかなかに熱烈な視線だ。

だけば、悪いな。

俺はお前の好意 恋心こなれて思えてやれん。

だつて、俺はノーマルだからな。

少し可憐に顔してるからつて付き合つてなんかやらんぞ。

にしてもなんで俺、こんなこと繰り返してんだら…？

立つたと思つたら

座つたと思つたら…。

「立つてゐるのか？俺は。それとも座つてゐるのか？」

…！

おおつと…少年が俺に近寄つてきた。

おこおこ…こんな道端で野郎に吉田タイムか？

やるねエ…少年よ。

…でも、なんでだ？

なんかあの少年の眼、腐つたものを見るよつな…軽蔑した感じじ
やないか？

なんか言つてる。

…ん～よく聞けないわ。

告白なりドン…とやれよ。

お前の想いには心えてやれないが、その気持ちを受け止めでやるから。

…え？

なんて？

「早く成仏したほうがいいですよ」

「…は？」

成仏？

なんの成り立ちや。

電波か？

こいつ、可愛い顔して電波はいつてんのか？！

それとも何だ？

新手の詐欺つ？！

それとも宗教勧誘ですかつ？

「えーっと……宗教はお断りですっ！俺、もう悟り開いてますから
ツー！」

「いや、もうこうつんじゃなくて……貴方死んでますよつて。もつき
から言おうと思つてタイミング見計らつてたんですか？」

「こやこやこやこやこやこや……俺死んでないつて……何言つ
ちやつてんの？！」

「あー……じゃあ、貴方今何してたんですか？」

「立つて座つて立つてるのか座つてるのか判らなくて考へてた
んだ」

「足元見れば手つ取り早いじゃないですか」

「見たよつ！けび、見えな……つづ……つづ……つづ……なんだこ
れ、俺足ねーじやん！つーことは死んでんじやん！……道理でわ
かんねーはずだよ……どんだけ馬鹿なの、俺……」

「だから、言つたでしょ！」

「でも、マジで？なんで、どーして……」

「何もないところで派手にずつこけて頭ぶつけて、打ち所悪くて
大量出血で血が足りなくて運も足りなくて……死んだんです。因み
に今日が貴方と俺の四十九日です」

「うつわー。うつそーん……かつこわりい死に方だな、俺エ……あ
れ……？でも、『貴方と俺の』って……君も死んでるの？俺と同じ日に

？」

「はい。貴方がバランスを崩して前へ転ぶ際に田の前を歩いていた何の関係もない俺を見事に巻き添えにしてくださったおかげさまで…」

「……」

「まつたぐぢうしたら前を歩いていた俺を巻き添えにして死ねるんですか。理解不能です。もし仮にこの先理解できたとしても許しはしませんがね」

「…君も打ち所が悪くて…？」

「その前に俺に何か言つ」とはないんですか？」

「すみませんでしたああああああああつ…！」

「はあ…。打ち所が悪かつたというか俺の転んだ先には何故か粉々に割れたガラスが大量に散らばっていて、おまけに空から植木鉢が降ってきて頭に直撃。言うならば転びどころが悪かつた…ですかね。全身血まみれになりました。その点、貴方は本当にただ打ち所が悪かつただけ。転んだ先には俺の足があつたくらいですもん」

「かなり情けない死に方だったみたいだな、今の話によると…」

「ええ。かなりです。きっと新聞に載りましたよ、あれは。端っこのはうだと思いますけどね。そして俺は不幸人として名前を載せられたんだ…きっと…」

「まあまあ、落ち着けよ。もつ済んだ事だし、死んだんなら関係ないって。な？」

「……氣楽でいいですね、貴方は。俺、あの日から数えて明後日の日に結婚する予定だったんですよッ！」「ビーしてくれるんですか？」

「それはそれは！」愁傷様です。…………って、え……ちょっと、お前今何歳だ！？」「

「享年29ですっ」

「はあつー？詐欺だ！んな顔して三十路前だったなんて」

「そういう貴方こそ大分歳いつてるんじゃないですか？そんな馬鹿な子供みたいな顔してますけど」

「……失礼だね」

「事実を述べたまでです。で？」

「30です」

「ほひ、やひぱつ。俺を見て詐欺だところのなら貴方も同じですよ」

「……うん、そだね、『じめん』悪かった

「そんなことさじづでもいいです。それよりじづ責任とつてくれるんですか？俺の幸せ奪つておいて……」

「どうして…じゃあ、結婚するか？俺とさ。死後の世界で新婚さんする？夫婦になっちゃう？」

「……ふざけるのも大概にしてくれませんか？」

「ふざけてなんかいないよ。だつて君、幸せになりたいんだろ？じゃあ、俺がそうしてやるって言つてんだよ。なんたつて俺の責任だからな」

「な…つーべつ別に貴方と結婚したくてそんなこと言つたんじゃありませんからねつ！」

否定しないことには〇×なのか。

ん…？

ちょっと待て。

どいかでこんな感じの…見たことあるな。

ハッ！

あのシンシンとした感じの台詞と態度は…。

来たああーーー！

シンドレをやんだったのかあ…お前ーー！

大好物だーーー！

じゃあ、この場合落とすには……。

「お前、俺と結婚するの嫌か?」

ト手にいる。

好意を寄せてくれる者に對してだけであるシン。

それが今俺にむけてだされていた。

ところはそこそこ、やっぱ俺に好意寄せくるんだなあ。

はじめはその気なんとかなりながら、じぶんなことわれた
たら可愛く見えるわな。

で、いつ言われたらシントンは絶対ああ言つ……。

「……貴方がどうしてもつて言つのならしてあげないでもないです
……。けどー俺が貴方と結婚したいんじゃないですかー勘違い
しないでくださいね……!」

リングーン……

ああ……来た。

正解だ、俺。

死んだけど春はつかんだよおお……！

「おひるー任せりー絶対幸せにしてやるからな」

「……本当にしおりね」と言つたからこそ、と貴子はついもぎこますからね

「望むところだ」

「……まだ、名前も互いに知らないことばかり。」
　　といふことで気付かない間に哈は落としてたけざい、可愛嫁（？）
　　を手に入れたんだぜ。

でかした俺っ！――

……………まだ、名前も互いに知らないことばかり。

幾つもの命を看取つて。

幾つもの命の誕生をこの身で感じ取つて。

心が温かくなるのを覚えて。

カラダが温かくなるのを知つて。

じんわりとした温度に、ほろりと涙を流した。

ねえ、ねえ……この星には幾つもの生命が同時に存在しています。

共生して生きています。

始まりがあつて終わりがあつて……。

樹齢千年を数える木だつて私には到底敵いません。

私より先に朽ちていきます。

実に悲しいことだけれど、必ずと…胸を張つて言えてしまいま
す。

そんな長寿の木が芽吹く初めから、朽ちる最期までを見届けられ
る者はまずいないことでしょう。

みれるなら始まりか、途中か、最期かの…いざれか。

この世の法則を破つてはいけませんよ。

けれど、私のような存在はそれを簡単に無視した歳月を生きています。

いつ戻てるのか判りはしない。

いつ生まれたのかも思い出せはしない。

この世の星の生き物は皆生まれてきては無に帰つてゆく。

私の感覚ではあつといつ間に居なくなつてしまふのです。

決して交わりは出来ません。

同じ時を生きていっても、同じ時に私は生きていないのでから。

私は死ねません。

皆と同じように時を積み重ねていくことは不可能です。

大好きな人も大好きだった人も友人も恋人も…皆私より先に死んでゆきます。

その時は必ずやつて来るのです。

側に居てくれると言つてくれた人も、約束を破つて死んでゆきました。

「めんどー言残して。

私はいつも見送る側の者なのです。

昨日生まれたと思っていた子供が気付いたら年老いた身体で孫たちに囲まれていました。

私は全ての生命の誕生に居合わせる者。

そして、全ての命の終幕に居合わせる者。

私はどれほど涙を流したことでしょう。

幾千もの命を看取つてきたとしてもそれでもこの涙は枯れぬ」と
を知らぬのです。

学ばぬのです。

慣れる事も知らぬのです。

知らうとしないのです。

判つてはいるのに、悲しみはやはつやつてくるのです。

新しい生命の誕生は新しい悲しみの匂いを乗せてやつてきます。

始まりには必ず終わりがつてきますから……。

喜びの合間に漏れてくる死の匂い。

それでも私は今尚ここに在り続けるのです。

「この世の全ての誕生を慈しみ、そしてまた誰かを愛しむのです。

大好きですよ。

私は私の身の回りを取り囲む全てが大好きです。

花は散ります。

ですが、また来年咲き誇ります。

人もそれと同じなのです。

芽吹き、地に足を下ろして散るまでの間を美しく咲き続けます。

そして、種を残して新しい花を咲かせる。

人も花も同じです。

脆く、弱く…でも、逞しく纖細な生き物なのだといつ頃において

…。

幾つもの生命を看取つて、そして、これからもきっとたくさんの
生命の終わりを見ることでしょう。

それはとてもつらく、悲しいことです。

ですが、それと同じ分だけの生命の誕生を喜ぶことができ、慈し
むことができるのです。

生まれて死に逝くのは人の世の理です。

この世の条理です。

それに抗う者として私は見届ける義務があります。

どうか健やかにお育ちよ。

どうか安らかにお休みよ。

どうかまた会いに来て下さいな…。

いつか誰か…私の終わりも見届けてくれる者が現れるのでしょうか

ならば、それはいつたいつの話になるのやい…。

ただ…もしあつたとして、さつきつと判つてこむことはそれがまだまだ気が遠くなるような先の、未来のことだとことなんでしょうね。

色チョンジ。

私はイロのなかで生きている。

たくさんの中のなかで…そ、私は生きている。

与えられた色。

私が背負う色。

ねえ、それって私の色？

私だけの？

私に合った、色？

宿命だと運命だと…そんなものに振り回されるのは正直言って馬鹿らしい。

アホくさい。

決め付けられた色に束縛されて心をかき乱すのも…なんだか嘲笑われているようで気に食わない。

だから、私はいつもドライ。

全て見下して見るわ。

客観的に。

…生意気な私。

大っ嫌いよ。

あの色も…。

見ただけですぐ私だつて判るもの。

私は黒が好き。

暗闇にまぎれて生きる者になりたい。

光は私には眩しそうるから。

だつて、私はドライだから。

田立ちたくはないのよ。

白い色でもいいかなって思うの。

白。

白の中の白の本当に真つ白で誰も偽つかないくらい白い色を背負つた私。

素敵だわ。

けれど、唯一の問題は白は汚れが田立つ…」れ。

だから、私は黒がいいの。

多少の汚れなら判らないでしょ。

だから、好きよ。

私が紛れ込んでも判りはしないわ。

けれど、現実は違うわ。

そんなこと、本当は考えるだけ無駄なのにな。

私の色はもう決められてあるんだから…。

「ねえ、ちよつと。私のこの色ビビリとかならないの？」

(黒) 「いいやないか、その色。いかにも女って感じがして」

「ピンクはたしかにいいわよ。けど、戦隊ものでそれってなんかイラッてくるのよ」

(白) 「えー、じゃあ、俺はどうするんだよ?」

「何?白が気に入らないなら色々な色をじゅりゅあ混ぜにしたペンキでもかけてあげましょうか?」

(白) 「…遠慮しとくよ。俺、白大好きだもん。うん…汚れやすくてさ」

「汚れやすいせにあんた存在感薄いわよねー。白だからかな、やっぱ。色薄いと存在も薄くなるの?…私、黒がいいー。ねえ、这么做にのでっかいのー私のピンクと換えなさいよ」

(黒) 「えつーこややわ。ピンク、だせーもん。」

「…あんたもダサいわよ。大体戦隊ものってなんでカラフル全身タイツなの?」

(黒) 「やういえばそつだよなあ…けど、もう相場が決まつてしまつとる。ヒーローは素顔では戦えないのさー。」

「カツ」「悪。」

(白) 「パンクがそんなに嫌なら赤とか青とか黄色とか…縁もあるけど、それはだめなの?」

「私は黒がいいの……だって他の色、膨張色じゃない…」

(白) 「君、また太ったんだね…」

(黒) 「んなつーそつかい…それでな。スリムに見える黒がいいと…けど、それって意味ないやろ。太ったんなら減量やで。誤魔化しは更なる不幸を呼ぶんやでつ…」

(白) 「でもも、君はそれほど太くなじやん。いたつて普通だよ~むじりやせてるほうだと悪つけ」

「…もひすくおなか出でぐるのよ…」

(白) 「え…それつて…」

(黒) 「お前…こつの間…」

妊娠したつてことよ、ばか。

父親は敵の親王よ。

何か文句ある?

(黒) 「…黒、譲つてしまふよ。俺、ピンクでええか?」

(白) 「幸せんな…」

渡り方

赤信号。

信号が変わる。

信号は変わる。

点滅して青へ変わる。

横断歩道。

人は渡るよ。

僕の横を通り過ぎていく人々。

僕なんかに見向きもしないで、まるでそこないかのように興味も何も示さない。

そう、それが僕だ。

そして、僕もそんなものに興味は示さない。

きっと、せいぜい気づくべからいで横を通り過ぎても振り返りはないだろう。

立ち尽くす僕。

横断歩道前で。

信号は青なのに。

渡つていいのに。

僕は動かない。

全てが無になつたような感覚。

錯覚…。

何者も映さない虚ろな瞳。

誰にむけられる事もなくただ漠然と前を見据えている。

心の動きを反映させない表情。

むしろ反映させるともいう。

心は動いてない。

だから、そう…反映は一応しているのだ。

ただ表情がないのが不自然なだけ。

僕をかたどる全てが僕の無情な心を映す。

静かに鳴り響くメロディ。

信号は青から赤へまた移り行く。

僕はまだ立ち尽くしたまま。

不審な視線さえも向けられず、僕は居る。

ああ…この世界で僕を知っている人が一人もいないう…。

ああ…この世界には僕を知ってくれてる人はもう誰もいないのだ。

信号は変わる。

赤から青へと再び。

そして、また人々は白い白線を引かれた道の上を歩くのだ。

僕は立ち尽くします。

横断歩道はもう渡らない。

だから、僕はもうここを動けない。

動かない。

一人立ち尽く僕。

誰もそう…気づいてないんだ。

僕がここに居るということを。

もう歩けないよ。

それでもいいと思う。

季節は変わる。

..(うひうひ)。

長いよう短い。

信号と同じ。

赤から青になるのは長いよう短い。

そして、短いようで長い。

人の心も同じ。

必ずいつかは移り行く。

想つている間は長いようで短い。

短いようで、長い。

ねえ、君も…あの頃の君の気持ちを僕は全然考えてなかつたね。

ひどいことをたくさんしていたと思う。

たとえそれが故意にしてしまっていたんじゃなくとも。

きっとたくさん泣いたんだろうね。

あの頃の君も、こんな感じだったのかな…。

少し、解った気がするよ。

それが気のせいでも思ひ上がりだとしても…僕は知ったよ。

寂しさを。

悲しさを。

1人で歩くことがどれだけ辛くて苦しくしんどいかを…。

君の笑った顔、好きだった。

綺麗で…とても可愛かった。

僕だけに笑いかけてくれた。

本当に僕だけだったんだ。

君には僕しかいなかつたんだ。

だって、君はいつも無表情で1人だった。

けれど、君は僕を見つけてくれた。

僕だけが特別なのだと全身で伝えてくれてた。

横断歩道。

信号は変わる。

いつも歩いていた道。

いつも君が寂しさを噛み締めていた道。

そこを僕は笑って通っていた。

1人じゃ渡れない。

1人じゃあの先へは行けない。

僕は知らなかつたんだ。

あの頃は知らなかつたんだ。

1人じゃ無理だつて、気付いてなかつた。

1人になつてようやく知つた。

僕の手は空っぽだ。

誰の手も握つていない。

誰も僕の手を握つていない。

君の手も、空っぽだつたんだね。

いつも君は僕を見ていた。

僕の手を見ていた。

後ろから、隣から、前から…。

見ていた。

知つてたよ。

君が僕の手と自分の手を繋ぎたいって思つてたこと。

けれど、僕の手はいつも誰かに繋がれていで。

右手も左手も繋がれていで。

他の事で、他の人でいっぱいだつた。

それをただ受け入れていた僕。

当たり前だと思つていた僕。

いつも1人君を置いて、僕は他の人たちと歩いていた。

1人がどれだけ悲しいか、痛いかを知らなかつたから。

君はいつも立ち止まつていた。

けれど、僕は戻らなかつた。

僕の手は空っぽ。

だから、もう動かない。

動けない。

君と同じ。

けど、君はもういない。

誰もいない。

僕が大切だと思っていた人たちはない。

信号は変わる。

季節も変わる。

人の心も変わる。

僕の心も変わった。

みんなの心も変わった。

そして、君の心も変わった…？

僕はもう…渡れないよ。

「空っぽだよ…………ねえ」

私は変わらないわ、ずっと1人

けれど、ねえ…私、嫌いなあの信号のように変化をしてみたくなつたの。

貴方に対してだけ、変化したわ。

そして、きっともう私は変わらない。

きつと同じままなのよ。

私はずっと一人だったから、変わりは来ないのよ。

ずっと同じまだわ。

だから1人にされたの。

ねえ、もし貴方が私を選んでくれたのなら、きっと私はずっと貴方の側にいられるわ。

そしたらもう寂しくなんか、ないでしょ。

「ぼさつと立つてないで行きましょ、ね！」

1人じや無理なら私がいるわ。

「……手、握つていい？」

「うん」

好き

好きだよ。

好き。

君のことが、好き。

とても好き。

誰よりも好き。

何よりも好き。

自分よりも好き。

けれど、君は僕のこと、好きじゃない。

むしろ嫌い。

きっと嫌われてるんだと思つ。

僕にはいつもとても嫌そうな顔をするし。

僕が近づくといつも不機嫌になるし。

けれど、僕はめげない。

だって、君が好きだから。

君に認めてもらいたいから。

せめて、受け入れてくれなくても認めては欲しいから。

君は僕の事が嫌い。

どうしてかな。

判らない。

僕には判らない。

君のこと好きだって僕が言つと、君は泣きそうな顔になる。

嘘つきって、いつも怒る。

そして、逃げる。

僕の前から逃げる。

走つて立ち去る。

時々歩いて立ち去る。

本当のことなのに、君はそれを嘘だと決め付けていつも切り捨てる。

拒絶する。

僕を。

僕の気持ちを。

君への想いを。

自分に向けられるこの感情が信じられないと言つよくな声で。

嘘つきって。

僕はいつも嘘ばかりだって。

本当は何も好きじゃないくせに自分にそんなこと言つなつて
やう言って、いつも怒鳴って、そして。

怒つたまま泣きそうな顔で、僕の前から消える。

嘘じやないのになあ…って言つても、君はそれさえも信じてくれない。

完全拒絶。

完全否定。

僕の存在さえも否定するような酷い行為。

けれど、僕はやつぱり君が好き。

好きだよ。

君が嘘だと言っても僕の中では本物だ。

好きなんだよ。

君のことだが、この世で一番好きなんだ。

なんて、重い言葉なんだうね。

けれど、君がそこまで僕を嫌がるのならやめるよ

嫌い。

嫌いだよ。

君のことが、嫌い。

吐くほど嫌い。

誰よりも嫌い。

何よりも嫌い！

自分よりも嫌い。

君のことが、この世で一番大嫌いなんだ。

これでいい？

君の言つとおり僕は嘘つきになつたよ。

君のこと好きなのに、嫌いだなんて嘘ついてる。

嘘ばかり。

どうすれば君は、信じてくれるのかな。

君にじまじかく近づかないでいたり、君がけいじけい僕を田で追つて
くることこ気付いた。

なんで？

と思いつつも君が僕のことを見てくれてるのだと想つと、それだけで嬉しくなつた。

けれど、無視。

舞い上がりつて近づいたらまた嘘つき呼ばわりをれてしまつから。

じばりぐは言わない。

言えない。

好きだって言わない。

嫌いだもん。

君のこと、嫌いだもん。

僕は嘘つきだから、これでいい。

これで本当の嘘つきだよ。

好きなのに嫌い。

そんなことしてたら君のほうから僕に声をかけてきた。

嬉しかつた。

けど、前みたく好きとは口にしない。

でも、言いかけた。

けど、途中で思い出してやめた。

代わりに嫌いだつて言った。

嘘つや。

本当に君に元々をつべ。

心の中で好きと感ぐ。

君に直接声に出して伝えても信じてもられないから。

いらっしゃらないこと言つても、それはとても辛いから。

けれど、嫌いって君に言つたとき、心が痛んだ。

泣きたくなつた。

けれど、情けないから我慢した。

嫌い。

君のこと、嫌いだよ。

そう言つたら君はカツと顔を赤くして、頭に血が上つたような…
そんな顔をして。

そして、その後に傷付いた顔をして、僕の前から去つた。

走つて逃げた。

それを呆然と見送つた後、なんだか…変な気持ちになつた。

君が僕の前から逃げ去るなんていつものことだけれど。

変な言い方だけれども、なんだかもう…いつものように逃げ去る
君の姿を見る事なんてできなくなるように思えて。

それはつまり、もう君と僕は話すこともなくなるってことで。

もう好きも聞いてもらえないくなる…？

そこでようやく僕は自分の失言に気付いた。

しまつた。

好きとは違つて、嫌いは本人に直接言つていいものではなかつた
んだ。

たとえそれが嘘だとしても…僕は君をその言葉で傷付けたんだ。

僕はあわてて君を追いかけた。

君の姿を捜した。

君をすぐに見つけた。

泣いてる…。

もう思つた。

けれど、君は泣いてなんかいなかつた。

顔を真つ赤にして怒つていた。

君の嘘つきで。

じつこいつ意味の嘘つきなのか判らなかつた。

君にずつと好きつて言い続けてたのに嫌いつて言ったことに対する嘘つき？

それとも本当は君のこと好きなのに嘘ついて嫌いつて言ったことに対する嘘つき？

どうす?

君が好き。

君のことが好き。

君が一番好き。

他の誰よりも、他の何よりも…好き。

好きだよ。

君が怒っている姿を見つけて咄嗟に僕の口から出たのは、やつぱり好きの言葉ばかりだった。

何回田の生田なのかもつ判らない。

何十回?

何百回?

これでまた逃げられれば、また記録更新だ。

聞きたげの。

そういうえば、よく考えればちゃんとした答えなんて一度もせりひつてない。

全部嘘つきってだけ言われて逃げられてた。

好きとも言われないけど嫌いとも… そう、嫌いだなんて、一度も言われてない。

ただ態度からみてそつかなって思つてたけど、まだ判らないんだつた。

好きつて瓶にまた言つた。

今度は逃げられなこよう抱きしめて。

腕の檻に閉じ込めて。

君は絶句して、怒つた。

嘘つきつて、また。

泣きそつな顔で怒鳴つて。

腕の中でもがいた。

けど、放さなかつた。

しばらぐしておとなしくなつた君の顔を覗き込んでみたら。

君は嫌いつて言われて怒つていた時よりも赤い顔をしていて。

照れただけだと判明した。

それで、ああ…と納得してしまつたことが一つ。

僕が好きって言つた後に君がすぐに怒るのは照れ隠しだつたけれど、何故毎回逃げるのか。

それはきっと真つ赤になつた顔を僕に見られたくなかつただけなんだろ?。

嘘つきつて怒るのが僕に好きと言われて恥ずかしかつただけだと知つて。

その後に毎回絶対逃げ去るのが真つ赤になる顔を隠すためだつたと知つて。

僕もつられるように恥ずかしくなつて、顔が熱く火照つた。

なんて可愛いんだ、君つて子は。

そこで僕は相当…君のことが好きなんだと改めて自覚した。

好き。

好き。

君
が
好
き。

見渡してみて

何度この言葉を紡いづと

君は信じてくれないよ

悲しみを胸に詰まらせて

それでもいつかと夢見てこらるよ

未練がましいだとか

諦めが悪いだとか

男らしくないだとか

意氣地なしと

笑われたつて

それでもと願う

その何が悪いといふ

声に出して

音にあるよ

気付いてね

覚えていて

ここにいていってことを

ここで遠くを今は見つめても

ねえ ねえ ねえ

きつといつか近くを見渡してみてね
どこか遠くを今は見つめても

1人じゃない証

いっぱいあるから

何度も心をこめて紡いでも

君はまだ信じてくれないよ

けれど

結局最後は君がはあとため息をついて

根気負けするだらつ

呆れたような

困ったような

そんな微笑を口元にたたえて

君を見る優しい視線に

どうか気付いて

包まれてみて

そのぬくもりに

甘えてみせて

恥ずかしがって

強がって

意地張つて

強情に嘘をつく君を

待つてるよ

助けてと

言つてくれることを

そしたら

いくらでも出来得る限り

力になつてあげられるから

みんなみんな

知つてるよ

君が強いってこと

君が優しいってこと

君がここにいるってこと

大好きだつて

思つてるよ

みんな

何度もだつて言つよ

いつかでいいよ

そばにいるから

気付いてね

大好きだよ

どこにも行かないで

ここにいて

凍結

「この世の全てを壊され

ああ、全てを…無にしてやつ。

この星はお前たちの物ではない。

もう期限は過ぎた。

ああ、一刻も早く…直ちに去ってもらわねえ。

私に、私を返還してもいい。

この世の全てを壊つた。

もはや、お前たちの住める場所ではなくなつた。

無駄な抵抗はやめたほうがいい。

見るに耐えない醜さがある。

無駄な足掻きはやめたほうがいい。

それはただ疲労を大きくするだけだ。

私にそんなもの、見せないでくれ。

許容の域を超えたのはお前たちだ。

聖域を侵した者たちは裁かれて、追放される。

「ここではない何処かへと…。

人の世の始まりのアダムとい、ヴのよつて…静かに憤激した見得ざる者の手によつて。

「ここで言つアダムとい、ヴは、その子孫のお前たち。

おじがましいことだが、ここで言つ神は私。

わあ、全てを無に還し、この汚れたカラダを浄化しよう。

お前たちほっこりから立ち去れ。

もはや息のできる場所ではなくなつた。

お前たちがそつした…私を蝕んできた。

私はもうボロボロなのだ。

カラダの内側から崩れてきている。

外の障壁だつて打ち砕かれた。

お前たちが私を壊すのだ。

守るなどとたいそうな事を抜かすな。

自惚れるな。

お前たちのその存在が私を苦しめる。

さあ、もう御行き。

ここにはいけないよ。

もう私はお前たちを守つてはやれないから。

どこかへお逃げ。

どこかへお逃げ。

私はもう何の機能も持たない、廃れた星。

もうすぐ崩壊が始まる。

私が崩れるその前に。

お前たちが出て行つてくれれば、私はまた再生できるのだ。

だから、しばしの休暇をおくれ。

しばしの休眠を…私が正常に戻る時間をおくれ。

お前たちの手は借りない。

必要のない助けだ。

ただ立ち去つてくれればそれだけでいい。

それだけで私は始められる。

また一からの出発を…。

だから、わあ…私の可愛こ可愛い愛しそたちよ。

全てを無に還す私からお逃げなセー。

全てを悟り、私に返しなセー。

私を。

私に託して、私から出て御行き。

もはやいじはお前たちの全てを無べき場所ではなくった。

さあ、早く、いじの星の全てを無に還す前に…。

何処へ御行きなセー。

そして、私は永い永い眠りにもう一度ついた。

その間、私のカラダは冷たく凍てついていた。

いつか全てが元に戻つて私が目を覚ましたのなら、また私を見つけて戻ってきておくれ。

ただそれだけをひたすらに願いながら…。

膨らむ世界

君の匂いがする

優しい香り

今となつてはこれだけが

この不確かなこれだけが

君が唯一残していったものとなつた

君がいつも抱きしめて眠つていたクッション

それは僕が君の誕生日にあげたもの

『「こんなのでいいの?』

『「これがいいんだ」

そう言つて君はいつも嬉しそうに抱きしめていた

それにしみこんだ匂いだけが

君がそこに居たところを告げている

君が確かに存在していたことを

人の記憶のようにあやふやで不確かなものとして

残されている

僕を包み込む

君の香りが

まるで君がそこに居て

僕を抱きしめてくれているよう

少し悲しい気持ちになる

けれど

そんなことは思ってはいけない

僕にはそんな感傷は赦されない

君が残す

君の優しさ

君が刻み付けた

君の残酷さ

君が示した

君の冷酷さ

その全てで僕を縛り付ける

『……』

『あよないうの時間だ』

君はクッシュンを手放す

名残惜しそうにしながら

ゆつべつと腕を解いて

そつと置いてゆく

まるで自分の代わつのよう

僕の側に置ると

静かに詠じてくるみつこ見えた

嘘つき

このクッシュンが欲しつて言ったのは君なの

君はそれを置いて

僕のところに捨てて行くのかい？

そこに籠められた想いも

僕に突き返して
君は涙も見せずに
振り返りもせずに
穏やかに笑つて
1人行つてしまふのかい?
香りだけが告げる
君がもうここに居ないのだといつひとを
もう帰つては来ないのだといつひとを
君の言葉がぐるぐると頭の中を駆け巡る
駆け巡つては答えを見つけられずに
僕の唇からこぼれていく
君はいつだつて不確かだつた
存在感は決して薄くはない
むしろ強くて
そこにこるだけで周りの者の視線を集めのような美しさで

いつも人を惑わせる魔性の者

美しいが故の悲しみによるものなのか

君はいつだって淡い笑みを浮かべていて

ビニカ嘘くさい

儂くて

触れたまぐすぐに壊れてしまいそうで

その存在がとても危うかつた

細くしなやかな四肢

僕の指に絡み付く指は白くてきれい

「いついた僕の手とは大違い

君は僕の頭を撫でるのが半ば癖だった

無意識のうちに手を伸ばしてきて君は

僕の髪の毛を

わしゃわしゃと無造作にかき乱して

ぱんと

手を置いたまま

書類に目を通しながら

つーむ…と

時折難しい顔でうなづいていた

一度君の書類を覗き込んだことがあったけれど

よく解らなかつた

いや

まったくわからなかつた

『どこの国の人葉なの?』

『わーとワーロッパあたりだよ』

君に訊いたら曖昧にはぐらかされただけだった

君はいつもやつ

何でもはぐらかして

本当のことは何も告げないことが多い人

クッションについた香り

君の残り香

君がここに居たという唯一の証

不確かな証

はつきりとしたものは

何も

ない

君は背を向けた

『やるべきことがあるんだ』

そう言つて

1人行く

往く

逝く

往つてしまつた

君の香り

君はきっと知らない

自分の残した存在の跡を

僕を包み込むこの匂いが

君がそこに居るような錯覚を引き起します

痛い錯覚を

僕に残して

君は立ち去った

「……と、こんなもんかな？」

「何がこんなもんかな……だよー? なんでものをお前は書いてるん

だ?ー貸せつ!」

「えー… 破つたりしないでよ? 力作なんだか」

「何が力作だよ。こんなもんに注ぐんならもつと他の事に有効活用しろ」

「ちえつ、自分が頭いいからつてやー。あー… もつやだやだ

「そんなことは関係ない。つてゆーか、これーよくこんな小つ恥ずかしいものが書けたな?…」

「えー、君に褒めてもらえるなんて嬉しいな」

「耳の聞こえが悪いなら耳鼻科へ行け。第一『さよならの時間だとか』『きつときーロツパあたりだよ』とか言ってないし! それに美しいが故の悲しみつて… なんだよそれ?! 意味解らん」

「でも、『やるべや』があるんだ』は言つたでしょ?」

「言つたけど、それは家事をしに行つてただけだろ? がーお前が何もせずにべたべたべたべたべたくつこしてくるからしなきゃならん」とが溜まりすぎて、さすがにイラツとしてきたから片付けに行って来たんだよつ! バカ!」

「それはそれは」へりへりへりへん

「うわー… そういう心の籠もつてない言い方つて大嫌いだなあ…

「ありがと!」

「……それも違つだる。ウザイよ

「ん~…もういいじゃんか、許してっ・君と離れてるのが寂しそぎ
てつい書きちやつたんだよ」

「……バカ」

それであんなものが書けるなんてすごい想像力の持ち主だな、お前。

お褒めに預かり光栄ですた

僕は一ノトから小説家になつた。

オオカミ少年 嘘をつく子供

ふふふ…

みんなみんなみーんな、大っ嫌いだよ！

そう言つて笑うと、振り返つた先の君は泣いていた。

君には私のことも映らないのね

『可哀そうな人』

そう呟いて君はクスッと口元に笑みをたたえた。

その瞬間、ぞくつ…と背筋を冷たいものが駆け下りた。

貫かれた、僕の度肝。

ねえ、ねえ…君も僕と同じじゃないか。

そして、僕もクスッと微笑んだ。

君には僕のことも映らないんだね

『可哀そうな人』

そして、僕は泣いた。

嘘をついた。

君にもみんなにも。

たくさんの嘘をついた。

優越感に浸っていた。

その快感に打ち震えていた。

嘘をつくのは気持ちよくなかったけれど。

そのとき感じた背徳感が、たまらなく気持ちよかつた。

クセになりそう…。

みんなみんな、知らないんだ。

嘘をつくるのが悪いことだと思ってるから、この快感を知らないんだ。

けれど、僕だってそれが悪いことだって思つてゐるから感じられる快樂なんだけどね。

あーあ…勿体無い。

けれど、誰にも教えないんだ。

独り占め。

僕だけ知つてればいいんだ。

それが僕の嘘だつて知らないときのみんなの顔。

それが真実だつて信じきつてゐるあの顔が。

しばらくして嘘だつて氣づいたときの、あの裏切ったなつて言わんばかりの表情を見るのが好き。

たまらなくぞくぞくするよ。

そんな僕の頭が、とてつもなくイカれてるっていうのを知つてる。

僕は知つてるよ。

ちゃんと自覚してるんだ。

けれど、やめられないよ。

もう最高さ。

世界に1人。

君はひーとり。

いつだつてひーとり。

今日だつてひーとり。

明日だつてひーとり。

明後日だつてひーとり。

ずっとずっとひーとり。

嘘つきだから嫌われた。

嘘に酔いしれたから嫌われた。

みんなみんなきーらい。

…違ひでしょ？

みんなみんなきーらい。

けど、それは君がみんなを嫌いなんじゃなくて。

君の事をみんなが嫌いって意味だよ。

嘘つときはきーらい。

嘘しか言わないから。

何も真実なんて伝えてくれないもの。

みんなみんなきーらい。

嘘をつく時はきーらい。

みんなみんな泣いた。

みんなみんな、君が泣かせた。

謝つても許さない。

びひせそれさえも嘘なんだろ？

取り返しのつかなくなつた世界に時はひーとい。

孤独を噛み締めて生きる。

嘘つきの対価さ。

嘘に快樂を求めた君は一人ぼっちになつたんだよ。

それを自分自身で自覺してゐるなんて。

それでもやめられないだなんて。

もう最高だね。

けれど、嘘をつきすぎた嘘つきは、もう嘘をつけなくなつた。

だって、周りに人がもう誰も居ないから。

嘘つきが嘘をつけなくなつたら、あとはもう孤独しか残つてない

のさ。

『可哀そうな人』

空は蒼かった。

思つたより蒼かった。

けれど、思つてたよりは澄んでいた。

とても綺麗だと思つた。

空は青かった。

思つたより青かった。

けれど、思つてたよりはくすんでいた。

とても醜いと思つた。

でも、これくらいがちょうどいいのだと思った。

それは人のよう。

人を映す鏡のよう。

天に在るものよ、地に在るものと比例して在れ。

どこまで続いているのか判らない、きっとどこまでも続いている果てのない空は命の分だけ拡がっているようだ。

幾つあるのか判らない、とてもたくさんある生命のようになくなくそこに在る。

人のようね。

人のようさ。

まるで鏡のようだ。

人と反映してる。

とてもくすんだ色をしてるときもあれば、とても澄んだ色をして

るところもある人の心のよう。

とても澄んでるように見えてくすみが取れないところも人の心みたい。

とてもくすんでいるように見えて澄んでいる部分もある人の心みたい。

ああ… とても醜くて綺麗だね。

空を見上げた。

そこにはまだ空が続いている。

青空が、在る。

太陽が、在る。

そして、隅の方に薄く姿を消した月が、在る。

空が在つて。

太陽が在つて。

月が在る。

蒼があつて。

光が在つて。

闇が在る。

そう… そう。

まるで人の世みたいね。

人の心の内^{なか}のようね。

ああ… 醜い。

ああ… 純麗。

正反対の意味を持つ二つの言葉が一緒に在るね。

とても可笑しいよ。

でも、それくらいがちょうどいいんだもん。

憧 れ

空を仰いで

飛べるなら

このまま空の海へとダイブしたい

けれど、やしたらもうひと

すつたりはするかも知れないけれど

心地良い風を感じるひとができるかも知れないけれど

その全ては一瞬の

一時のひとで

やしたりきひとつものあと

ひとのカラダは下へ下へ下へ…下へと

海の底に在る地へと呑みつけられるの

やしたりきひとのカラダはぐらかすやぐらかすになつて

見る影もない

悲惨な姿へと変貌するの

誰の目にもそれが自分だと判らない姿へ

生まれ変わるの

飛行

落下

消滅

変貌

転生

天使は人に変わるの

人は悪魔に変わるの

悪魔は天使に変わるの

そう、そう：

繰り返し繰り返し

人の形をしたものは空に憧れる

そして

それが一時のものだとしても構わないと

その身を田に投げ出すの

一瞬の浮遊感

急速に落ちていく

加速度

風圧・気圧が

このカラダを包む皮膚を裂いていく

ピシッ

ピシ…パシッ

ビシッ

ブチッ…

ブシユッ…

そしたら

赤い水が流れしていく

線を引いて

尾を引いて

糸を引いて

落ちていく流れとともに

そうして赤い水が、このカラダの通り過ぎた印を残していくの

溢れ出す

それが生きている証の赤い水

綺麗だと思った

とても綺麗だと思った

きれい

キレイ

地にカラダが着いて

ぶしゃああ…

といつ音を立てて飛び散る

それはこのカラダに流れていた赤い水

激しい赤の水飛沫

溢れて無くなる

内側から外側へと

出て行く

見事な絵を描いた。

色をした水が

深い深い

赤い赤い

色をした空に

深い深い

蒼い蒼い

空は赤い赤い印によつて一いつに裂かれた。

痛みさえも、それは愛？

あの人の苦しむ姿を見る。

傷だらけの後姿。

どこかさびしげ。

あの人の全てが何者にも勝つ^{まさか}て『いる』のに。

どうして唇を噛み締めて苦しむの？

あの人の足元にすりよる。

いつもみたいに笑って抱き上げてくれない。

どうして？

まるで僕がここに居る^{ここに}氣づいていないのかのようだ。

今までの日々が作り物だったかのように微動だにしない。

僕の存在に反応しない。

あの人は泣かない。

いつも苦しそうにあえぐだけ。

くつろげた襟元からかすかに覗く細く白い首に浮かび上がるそれ

は、何？

赤い、赤い…赤い痕。

まるで誰かの指が絡みついたような痕。

あの人はこれに苦しめられているの？

…僕が消してあげたらよかつたのにな。

けれど、僕には無理だ。

そんな力は無い。

あの人を助けてあげられるだけの、

守つてあげられるだけの、

包んであげられるだけの…力が無い。

無力だ。

だから、どうか…誰かあの人を救つてあげて。

抱きしめてあげて…。

僕はそれをしてあげられないから。

呆然と立ち尽くすその姿。

何を考えているのか判らない虚ろな瞳。

不規則な呼吸。

あれは...過呼吸?

ストレスからくるつていうあれ？

袋…袋が必要だ。

ଶ୍ରୀମଦ୍ଭଗବତ

袋を見つけた。

夕暮れのテーブルの上

だけど、手が届かない。

嗚呼……なにもできないのか。

このまま何もできず死なせてしまうのか。

七八

人影が現れた。

あいつは誰だ。

倒れこんで胸元を押さえるあの人があごをすつととつて。

あいつはあの人へと唇をつける。

こんなときになにをやつてるんだ。

不謹慎だ。

けれど…あれ?

あの人呼吸が元に戻つてゆく。

はあ…と唇を解かれ、呼吸が正常に戻つたあの人があの田をひとりと
わせて。

朦朧とした意識の中で涙を流して。

あいつのぬくもりを求めた。

カラダを手繕り寄せて。

何度も何度も唇を重ねあわす。

嗚呼…あの人も苦しくないんだ。

呼吸は正常にできているし、なりあの傷だっていつかは消えるん
だよね。

あの首に付けられた赤い痛々しい痣だつて、いつかは癒えるんだ
よね。

あいつが癒すんだ。

あいつが抱きしめてくれる。

あいつが側に居てくれさえすれば、きっとまた笑ってくれる。

僕にじゃなくて、あいつにむけてかもしぬないけれど……。

あの人があのまことに笑えるなら、僕はそれでいいんだよね
？

たとえ、今度は僕が笑えなくなつたとしても……それで、いいんだ
よね……？

…………にして、一體誰があんな傷をつけたんだろう。

一體どこの誰があんな癌をつけたんだろう。

僕は知らなかつた。

あの傷すべてが、あいつによつて付けられたものだつたといふことを…。

嗚呼…それでもあの人はあいつを愛しているのですね…。

廻り散り

本日の出来事、ついでに私の今日の出来事。

本町なら今頃家で夕食作つて精を出していたはずなのに。

ああ…これまた自分、止みやうになくな。

花屋に肉屋に靴屋に八百屋。

諦めて濡れて帰りませうか…？

周りの店には傘なんて売つてやつてあつませんじ。

こじても…ああ。

あそこは木偶の坊やとまへ一体何をこじらへやるのでしゅうな。

あんなところだ、女の方と肩を並べ歩こんだな。

……………ダメでしょ？

貴方をいたむかわざの話です。

少しの用がありますので……無理にはさせません。

「お手承、頂けますでしょうか？」

「まだしばらく止みませんし、お願いします。

」の雨の中、さすがに濡れて帰るのは少々忍びないです。

「ねえ、ねえ……私を入れてくださいませんか？」

笠。

傘。

かさ。

力サ。

アハ、アハ、アハ…。

…御一緒して頂けるんですか？

有難う御座います！

また後ほど改めて御礼をしますね。

気なんて遣つてませんよ。

なんだか私の気が済まないだけですか？…お付き合いでござりますよ。

では、失礼致します。

モト モト モト モト……

。

えつと……そりですねえ……貴方はどちらに向かわれる御予定でした

のですか？

駅？

なら、私もそこまで結構です。

ええ、大丈夫ですよ。

駅なら電車にでも乗つて帰れますし。

それでも自宅まで行けりとすれば濡れるんじゃないですか？

…ふふふ…。

お優しい方ですね。

でも、そこは御気になさいよ。

駅の売店になら傘くらしきりと売っているでしょ？から、そこで買います。

…え？

いいですよね…そこまでしてもらわなくて…かえつて申し訳ないですから。

…。

…そうですねえ…そこまで言つて頂いてるのにお断りするのもなんだか失礼ですよね。

では、貴方のお言葉に甘えてせて頂きます。

ふふ…可笑しな方ですね…貴方は。

「アラ、アラ、アラ、アラ、アラ…」

荷物は持つてくんださいなくて結構です。

無理言つて入れて頂いてこの身の上、私にそのよつな氣なんて遣
わないで下さいな。

それにしても雨脚が強まつてきましたね…肩とか、濡れません
か？

……ああ…、ほら。

もう少し此方にお寄り下せこな。

肩が濡れてるじやないですか…！

私のほうが入れて頂いてる側なのに変な遠慮なんてしないで下さ
い！

はみだしてゐなうぢやと傘にお入り下せこ。

私は少しくらい濡れたつていいんですから…ね？

説小治政の癡人

213

どうです？

少々散らかっていて見苦しいかも知れませんが、お茶でも飲んで
行かれませんか？

まつまつまつ…。

その……私のほうから誘つておいてなんですが、たいした御持て成
しもできず、すみません。

粗茶ですが、『一服どひだ』。

それ、玉露なんですが…どうですか？

玉露とか、お嫌いですか？

そうですか。

ホツとしました。

お口に合つて嬉しいです。

まひまひ…。

何を言つてゐるんですか?

嫌ですねえ…?

…これは一体何のプレイかって?

…なんですか?

仰りたいことがあるなら、言つてくればまつて結構ですよ。?

…何ですか?

その眼差しは。

..... 本当何を言つてゐんですかあ？

頭、ボケましたか？

もう随分歳ですかねえ……貴方も。

え？

私のほうがその倍年上ですつて？

はつ。

だから、なんです？

なんだつて言つんです？

私、買い物に行つてたんです。

そしたらこの雨に降られたんですね。

判ります？

貴方が急に私と夕飯を一緒にしたいつて言つから、急遽材料の買
い足しに出かけたんですよ！

……貴方のせいです。

貴方が私と夕飯を食べたいなんて言つから……なのにつ！

当の貴方は何を思つて他の女と笑つてたんですかっ！？

あれには怒りよりも呆れました。

拍子抜けしました。

まさかあんなところで油焼つてるなんて……！

私が困ってるって知ってるくせに……。

メール、見ましたよね？！

言い訳なんて結構です！！

もう帰つてくださいな！！

…………え。

道に迷つて、あの女の方と話してらしたんですね……？

あそこに行くために……？

……なんで？

……私のため、ですか？

…………白々しいですね。

でも、まあ……いいでしょ。

信じてあげます。

さて、雨も完全に止んだみたいですし、さあ、夕飯作りを再開し

まつ…

。

まじょうか。

…手洗ってくださいるんですか？

ふふ…ちゃんと手は洗つてきてくださいね？

何の話？夫婦の話

今宵はあの方に会える口。

年に一度の逢瀬。

空が晴れれば、見事な星達が橋を渡すところの…。

なんとしたことか…。

空は雲が覆つてゐるではないか。

これではあの方の田映きお顔が」の田に映らぬではないか。

ああ…なんとこう由々しき事態。

これではあの方と今年はめぐり逢えぬかも知れぬ。

ああ…お顔を拝見できぬだけでなく、拝顔も危ふまれぬのか…。

どうしたことか。

どうしたものか。

せめてあの方が極度の方向音痴でなければよかつたものを…。

いままでは毎年、晴れていた。

だから、探すのにもそれほど手間はとりずく済んでいた。

だが、今宵ばかりは勝手が違う。

今宵は引き裂かれてから後初めての曇り空よ。

きっと、もうあと少しもすればあの方だつて動き出す。

私を捜して。

「自分が極度の方向音痴だということを」理解なさつてないから。

ああ…これはあの天様に直訴に行かなくては…

「もしもし、頼もうー天様はー在宅であられるかつ？」

「何ぞ? 我に用があると思しき者よ…何故なにゆえ來たのだ? 申し上げて
みよ」

きい…と門扉が開く。

因みに高さ一メートル。

門扉といつか…これは柵に近いよ。

周りは丸く囲まれてるだけだし…これ、柵にちよつと入り口つけただけだよね？！

……天様、もうひょっと威厳のある邸宅に住もうよ。

ケチつてないでせ…どうせ僕等みたいなから税金巻き上げてるんだからさ。

その分、贅沢して見せてくれないと怒るに怒れないんですけど…！

税金、^{たけ}高えんだよ…！！ って。

…ハツ。

違うんだった。

今回私は税のことで申し立てに来たのではなく、天候の事で直訴に来たんだった。

「あの今夜の天気の事でお話があります。今宵は何故曇りなのですかっ！？」

「我がチで気分が憂鬱だからよ

۷

元一！？

神様かチ?

チレレレレレレレレレレレレ

二二

二

二二

これが失礼者そのうがた顔を立てるに

卷之三

何故に?』

「何故つて! 知ってるんでしよう? 私と姫のことを」

「姫……？ 何だ、その姫とやらは……？ 美しいのか？」

「はい！もちろんに御座います！それ故に親ばかな御父君に家に

「ほほう…是非我の嫁に欲しいものだな。監禁プレイは大好物

じゃ…」

「あの方は私の嫁ですっ!…といふか、ご存じないんですか?…」

「何をどう?」

「私と姫の話ですよ」

「それが今宵そちが天氣を変えて欲しい理由かの?」

「はい」

「ならば、それは聞き入れてはやれん願いだな」

「どうしてですか?…?」

「我もその姫に会ことつなつた。案内してたも

「…だから、私の嫁ですって、」

「承知しております。だが、愛は奪うものぞ」

「…どうこう御家庭で御育ちになられたんですか、貴方」

「あれは…色々激しかつた。我が小学一年の頃、母が他の男の稚児を三人も身籠つてな…更にその翌年には生まれた娘と事実上血は繋がつてないだとかで父が性交を求めるわ…。その更に、翌年の春

にはまだ小さき息子に今度は母が手を出すわ……どんな意味合いで
どうどうでうだうぐわやくわやくチユグチユ……

「…………す」家庭でお育ちになられたんですね。わー、さすが
天様。普通の者はついていけませぬ。」

「そつ褒めずともよ」

「褒めてないんですけど。」

「それに免じて天氣は変えてやれぬが、その姫の許へ導いてやろ
う」

「え！いいんですか？……でも、どうやって？」

「ふつふつふ……これを見よー。いまだかつて誰も見たことのない
我の目玉ランプじや！」

「……」

「「」うキラーン　ヒカアア……といつらつに光るぞよ。これで
道を照らしてやる。有り難く思え！」

「わー、天様さすがです。す」いです。有難う御座いますです。」

「……変な言葉を使う奴じやな。よし、まあいい。行くぞ」

「ひして私はとても明るい目玉ランプを持つ天様を手に入れまし
た。」

天様のが日が、こうキラーン、ピカアア……と光る、とてもす
ごい技です。

さあ、早く姫の許へ。

「彦様、どういらっしゃるのです……」

わたくし、姫と申します。

つい先ほど、私を溺愛してくださっている父上から逢瀬のお許し
が出たので早速外へでてみました。

ですが。

真っ暗で、何も見えません

毎年星達が道を照らし出して貰ってるのですが、今宵は何の光りも在りません。

こんなこと、初めてです。

「……と、あれは……なんでしょうか

何かむこうが光っています。

人影のようなものが二つ……。

もしや、そのどちらかに彦様が！？

けれど。

「……不気味です」

なんですか？

あれ、田玉が光つてません？

ちょうど人の田の位置辺りが発光しているように見えるのですが
……。

私、長らく外でないついでに田玉が悪くなってしまったのかしら。

それともあれが今の流行といつものなのでしょうか……。

……謎です。

「あ。あれ、姫だ！おーい、姫え！私です、彦です！」

走る彦。

「彦様っ！」

走る姫。

「姫ー」

走る彦。

「彦様ー」

走る姫。

「ひめー」

距離残り僅か一メートル。

「ひー」ともー」

一人は感動の再開を果たす…と、そのとき。

「ひめえ…ぐえツ…」

彦から変な奇声が上がった。

「彦様ツー?」

姫は驚く。

「つるわこぞよ、彦よ。そちの嫁と言つのはーの方かななるほど。
これは誠美しい」

「でしょーつー?ね、ねー言つたとおりの美貌でしょーつー。」

天にはたかれた頭の痛みなど、今の言葉で吹き飛んだ。

彦は我がことのように嬉しそうに顔を上げる。

だが、天は顔を顰め、言った。

「馬鹿者か、そち。想像以上の美しさじゃ。そこ姫、是非我と
楽しく監禁プレイをしようだ」

キラーン。

超爽やかな笑顔。

引く姫に、青ざめる彦。

七八一〇

「なんじやなんじやなんじや——。」——わしの嫁の顔で黙語る。

現れたのは。

「お父様！」

「ゲー！ 姥…！」

「げー! とはなんじや、相変わらず無礼なー! ん? そのおぬしさ何着こや?」

「天と申します」

「（あの天様が敬語を使つてゐ——！——さすが帝——）」

「ふむ、天か。で、貴様は何用でここへ参つた？」

「こちらで監禁プレイが繰り広げられていることに居ます彦から聞き及んだものでして、それは是非とも参加したいという所存で参ったに御座います」

「ナヌうう…？貴様あ…なかなかいい眼をしておるな。よし。眞に入つたわい。わしの嫁にしてやるわー。」

「え…？それは、わたくしめとも監禁プレイを行つてくだるとこいわ」とですか…？」

「（問題点はそこ）かよーつ…他にはないのかつーあるだりつー。」

「

「ああ…思う存分、いたぶつてやるわー。」

「（きゅん…）帝…有り難き幸せ。何くれー満足をせらるか不安ですが、どうぞ可愛がつてくださいませ」

「わかったよ、よろしく頼もわー。」

「（じつて、彦の粋な計らいにより）違つよつ！私、してねーしつ！）新しい夫婦がここに誕生したのでした。

何もかもが本当に…新しい試みだと、帝の娘夫婦は思いました。

つて、私と姫の話はつ！？

もうこれでおしまい！？

ねえ、ねえ…つ！

何のために

人は何のために生きるの？

人は何のために生きててるの？

人は何のために生きて行くの？

問うても誰も答えを返してくれない。

誰に訊ねても曖昧にはぐらかすだけ。

だから、きっと…ああ。

誰も答えを知らないのね。

なら、私が自分の力で見つけ出してみせるわ。

人は何故生きるのですか？

人は怒るために生きるのですか？

人は泣くために生きるのですか？

人は笑うために生きるのですか？

人は悲しむために生きるのですか？

人は喜ぶために生きるのですか？

人は何かと出会うために生きるのですか？

人は何かと別れるために生きるのですか？

人は何かに縛られるために生きるのですか？

人は何かに依存するために生きるのですか？

人は痛みを受け入れるために生きるのですか？

人は快樂を受け入れるために生きるのですか？

人は何故生きるのですか？

いくら理由を並べ立てても考えられる可能性はぬきない。

これはそう…もしかしたら、人それに違つからなのかもしけ

ない。

人それぞれに、何のために生きるのか それが違うからなのか
かもしれない。

なら、正確で明確ではつきりと一つに決まった答えはきっとどの世にもないのかもしない。

けれど、『自分らしさを見つけるために生きる』 これだけはどの世にでも言える事だろう。

人が何が故に生きるのか。

それが個人によつて違うのならば、『自分らしさを見つけるために生きる』は共通している。

では、人は何が故に生まれるのですか？

自分らしさを見つけるために生まれるのかも知れない。

だから、そうね…。

人は何かと出会つるために生まれるの。

人は何かと別れるために生まれるの。

そして、誰かに自分が生きることを望まれて、それがとても嬉しい
くて生まれてくるのかも知れないね。

そうだったらしいなって、私は思うな。

人は誰かのために生きるの。

人は自分のために生きるの。

人は誰かと誰かが想い合つて生まれるの。

人は誰かの想いに応えて生きようと思うの。

誰かの願いに応えたくて、生きたいと思うの。

そして人として、個人を確立させて生きるために生まれてくるの。

誰かに愛されるために。

誰かを愛すために。

そう… そう。

人は皆、そうして生まれてきて、生きて新たな生命を生み出して、死んでゆくの、皆。

風流

空を見上げる。

午後11時の夜空。

真つ暗闇の外の景色。

都会とは違う自然なままの空。

ネオンの光なんてないよ。

ちらちらと僅かな街灯だけさ。

外を彩るのは、人が作り出した光はここではこれくらいさ。

田舎だから。

真つ暗。

私は空を見上げる。

部屋の開け放たれた窓から。

1人の夜。

静かでとても落ち着くけれど、そのどこかに虚しさが残る。

わびしい。

昼間はじわじわとした暑さに死んでしまうが、夜中はとても涼しい。

何たる不思議。

だから、冷房はつけずともこいつして窓を開けておけばそれだけでほら…十分なさ。

作り出されたものではない自然の風はとても心地良く私を癒す。

優しい風。

肌に優しい風。

じつとつした部屋をひんやりと冷ましてやへよ。

午後11時半。

しい…んと静まりかえる外。

徐々に近所の家の明かりも消えてゆく。

嗚呼…本格的に夜だ。

そんな中、私はいまだ涼みにふける。

とても心地のいい風を無下にできぬのだ。

団扇を片手に庭を眺める。

午後11半にしてようやく私の前に姿を現した月明かりだけが照らす庭は少し幻想的だ。

私のいる部屋は電気がつけられていない。

節約…という訳でもないが、なんとなく、今はそんな気分だ。

そう…風流を味わいたいのだ。

吟味する。

この今の空間だけを私は見つめて。

まるでこの世界の時が止まってしまったような錯覚を引き起こす。

けれど、風は吹いている。

だから地球はまだ生きているから時は動いているのだ。

静か過ぎてそんな馬鹿なことを思つてしまつ。

けれど…嗚呼。

本当にこの世界に私ただ1人が取り残されたよう少し…怖い。

風鈴が鳴る。

チリー…ンと、静かに己の存在を私に示す。

それに対しても、はいはい判つてますよと返してしまつのは私も大概年寄りなせいだろうか。

だとしたらとても心穏やかな年寄りになつたものだと思つ。

さて……あともう少しだけこの時間を楽しんでから寝るとなつてしまふうかね……。

あー……年寄りは腰が重い。

夏なりやの

夏の朝。

騒がしい朝。

日本に生まれ育つて十五年も経つところに。

私は今まで何をしていたのか。

何を聴いていたのか。

どうして知らなかつたのか。

いや、忘れてしまつていただけなのか。

夏の朝が、こんなに騒々しいものだとは思わなかつた。

ちょっとびっくりだ。

蝉がミンミンと煩く鳴く。

まさかここまでだとは思わなかつた。

この辺り一帯に一体どれほどの蝉たちがいるのだろうか。

私は蝉が大嫌いなのであえてそれを見てみたいとは全く微塵にもこれっぽちも思わないのだが、そんなことを思つてしまつほどだ。

一体どれほどの蝉が同時に合唱大会を開いているのだろう。

…いや、これは誰が一番大きな鳴き声なのかだとキレイな鳴き声のかだとか騒がしく鳴けるのだとを競っているかもしない。

だとしたらなんて傍迷惑な。

競うならもつと他の事にしろー

もし言葉が通じるなら是非そう言いつてやりたいものだ。

だが、生憎と言葉は通じない。

話しかけてみたいとも思わないが。

あのおおまじこ眼で見つめられるとそれだけでビックリにならうだ。

だけど、もし通じたとしてそれを利き入れてくれて誰が一番早く飛べるかとで一斉に空を飛ばれた田には卒倒なのだ。

…まだ姿を見せずして騒がしく鳴かれているほうがマシといつものだ。

朝から夕方くらいまでひたすら鳴き続いている蝉たち。

お前たちに休憩と言つて言葉は存在していないのか。

…確かに言葉は存在していないが… そう、言つながらば概念だ。

とにかくやかましいよ。

けれど、毎年この季節には考えさせられることがある。

蝉の一生は短い。

人のそれよりももつともつとずっと短い。

日にちで言えば一週間程度。

なんて呆氣ない一生。

あ…とこう声さえも出ない。

お前たちは気付いて欲しいのか？

だから鳴くのか？

すぐに居なくなるけれど、自分はここに確かに生きていたのだと
気付いて欲しくて。

それとも蝉と人を重ねて見てみればいいのか。

蝉の一生は短い。

そう日にちで言えば僅か一週間程度。

人間の感覚からすればとても短い。

ならば、蝉の感覚におきかえれば人間の寿命はとても長く思える。

人間の感覚に置き換えれば蝉の一生がとても短く思えるよ。

お前たちは夕暮れになると大人しくなるよ。

その鳴き声はだんだん落ち着いてくる。

もしかして、お前たちは朝から鳴き続けるから鳴き疲れて夕暮れ前にはその大半が消えて逝くのか？

ひりとぼつくり簡単に地面に転がり落ちるのだろうか。

そのカラダを地面に預けて一眠りするのか？

嗚呼…ならばお前たちの生き方は潔く、美しい。

私の嫌いなぞつとするその醜悪な見てくれに似合わず。

もし地球温暖化で一年のうちのほとんどが夏になつたとしたら、お前たちはもっと長く生きれるのだろうか？

果たしてそれは誰にも判らない。

その果てに

貴方の腕に抱かれて眠れるなら死んだつていいと思える私を許して。

…なんてね。

そんなことを笑つて口にしたら、私は貴方を泣かせてしまっていた。

ああ。

ああ。

なんと、なんて。

罪深き事だらうつか。

ひつそりと、想いを通り合わせていた。

誰にもきっと受け入れてもらえないだらつゝの愛を。

誰も認めない。

きつい固定観念。

人は皆同じではないだろうに。

ならば他人に、他の誰かに認められなくたっていい。

二人だけの想いで結構。

ひつそりと愛し合いつくらになら、きっと誰にも責められないさ。

外の世界を閉ざして笑う。

一人でただ居られるのなら、たとえ周りが自分たちを認めなくて
も生きてゆけるだらう。

それは誰かが、他人が壊してはならないもの。

だからもう放つておいて。

強気に貴方さえ居てくれれば　なんて、囁くけれど。

黒い大きないつも揺れている瞳を瞼の裏に隠して。

君は瞳を伏せる。

腰を抱き寄せて、顎を持ち上げて上を向かせて。

最低　　とまでは思わないが、無責任すぎるとは思つ。

うか。

知らないから、異質だと責めるのだろう。

赦されないのがこれほどに辛いことだなんて誰が知つていただろ

いつも少しの背徳感。

罪悪感を感じながら俺は君に触れる。

その瞳がいつも揺れているのを常に不安だからなのだろう。

ふつくつとした薄い紅を差したような瞳を少し運ばせて。

薄く口を開けて、俺がそこに触れるのを待っている。

赤く熟れた唇を指先で少し撫でなぞって。

そして、顔を近づける。

徐々にむりむりと。

君との距離僅か五センチ程度で俺も田畠を閉じて心の中で呟く。

あ。

早く裁きが下ればいいのに

一人で居られるのならそれだけで幸せ。

それになんら嘘偽りはない。

一人あつてこその関係。

一人あつてこその幸福。

けれど、やはりこの「時世」。

誰か一人がおかしいと言えば皆が皆流されてそんな風に責め立てる。

だから、誰からも許してもらえない関係が辛いのは変わりはない。

君は泣く。

人知れず。

俺に隠れて。

一人泣く。

周りに白い目を向けられるのが怖いのだと。

好きと咳いて繰り返して。

そして、君は壊れしていく。

やつとこいつが俺を責める日が来るだらう。

好きなのに毎日して苦しきのだらう。

手を引いて抱きしめた。

この想いが君を狂わせていく。

君を苦しめる原因が自分だなんて。

罪深きひとだらうか。

なんと、なんて。

ああ。

ああ。

その行為がいけなかつた。

一人で居られるならそれだけで幸せ。

そうだよ。

そう。

幸せだつたんだ。

君と居られて。

けれど、それは二人あつてこそそのものなんだ。

ごめんね。

ごめん。

早く一人に裁きが下ればいいのにね。

なんて、祈りながら俺は細い君の首に手をかけた。

徐々に力をこめていき、君が息苦しさに僅かに顔をゆがめる。

僕は無表情でそれを眺める。

力をこめて力をこめて、きゅっと君の首を絞めてゆく。

君はそれを見つめながら幸せそうに微笑んだ。

俺もそれを認めて同じように微笑み返した。

ああ。

ああ。

なんと、なんて。

罪深きことだらうか。

愛する人をこの手にかけるだなんて。

息が苦しい。

上手く呼吸ができない。

君は笑う。

やつと持ち上げた腕に、手に力をこめて。

その先に俺の首を捉えて。

ゆづくつとゆづくつと力をこめていく。

そのたびに呼吸が苦しくなっていく。

気管が締め付けられているからだらつ。

君は囁く。

キレイに笑つて。

『貴方と居られて幸せでした。 愛します、死しても。永遠と誓います。』

俺も囁く。

『君と囁きられて幸せでした。 この世の何よりも誰よりも一番に愛します。死しても世であるつとも。幾度生まれ変わつとも、永遠であると誓います。』

ああ。

ああ。

なんと、なんて。

罪深き愛だらうつか。

愛する人をろくに幸せにできずに死なせてしまうなんて。

一人だけの世界では人は生きていけないので。
たとえ愛する者同士だとしても。

臆病者だと笑つておくれ。

一人で膝を抱えていることしかできない能無しだと、陰口を叩いておくれ。

僕はその分、強くなつてみせるから。

今のは、せいぜい罵つておいておくれ。

僕が立ち上がる前に。

さあ、お願ひ。

盛大にお礼をしてあげるから。

盛大に辱めておくれ。

もうすぐしたら全て笑って受け止めて、倍にしてお返してあげるから。

楽しみにしておいで。

自信がないなら、もがいて泣いて縋つて…それからどうしようもないと諦めたなら私にこうがいい。

それまでは一人孤独の海に沈みなさい。

浸りなさい。

血の海に。

失望なさい。

己の無力加減に。

そうしたら、私がそこから救い出してあげてもいいわ。

ほり、優しく抱きしめてあげる。

首輪を買つてあげるわ。

きつくれの身に食い込むよつな…痛みを『えりれるよつなのを、
付けてあげる。

きつと可愛いや。

よく似合つはずよ。

だつて、この私が選んだ貴方ですもの。

この私が選んだものが、この私に選ばれた貴方に似合わないはず
がないわ。

ふふふ。

最高よ。

ワンーとでも、一ヤンーとでも鳴いてみせなさい。

そして、靴をお舐め！

私がご主人様だと判らせてあげるわ。

まずは従順なそのカラダに。

それから強情なその自我に。

最高な私が最高な貴方を最高に辱めてあげるわ。

楽しみになさい。

「陵辱」

ああ。

それはとても快感ね。

貴方は女かしら?

「屈辱」

その歪んだ綺麗なお顔、最高だわ。

「汚辱」

綺麗だわ。

もっと嫌がりなさい。

「恥辱」

素敵ね。

「羞辱」

ああ。

とてもいい響きだわ。

「醜陋」

ああ。

それはとても不愉快なものね。

時は満ちた。

君に、 いの首輪を譲つてあげる。

それとも、 新調する?

もつときつい刺々しいのに、 する?

その首から血が滲み出るよしお... そんなのこじょうが?

大丈夫。

わつと似合ひつよ。

とっても可愛いんだもの、 君。

その綺麗なお顔によく似合ひつよ。

その淫辱に歪んだ表情は。

君の好きな言葉の一つだね。

今にして思うとなんて素敵な言葉なんだろうね。

どうして気付かなかつたのかな?

でも、 君のおかげで解つたよ。

さア、 靴でも舐めてもらおうか?

今日のこのときのために頑張ったんだよ？僕。

一日中泥の中駆け回つてや、歯も磨かないじじいに歯ませたガムをふんだりとかせ…最高に汚くしたんだ。

意外と難しいね？

一日で汚くするなんて。

君は一体昨日までピーナッツあんなに汚くしてたんだい？

でも、まあ。

一日今までしたる瓶も舐める甲斐があるつてもんだよね。

セト、モーモーー

ニヤン…でも、ワン…とでも、『主人様とでも可愛く喋いてみせなよ。

やしたりと、特別優しく…激しくたっぷり可愛がつてあげるから

いつもみたいに笑つて見せてよ、ねえ？

強気じゃないと面白くないじゃない？

弱氣でも好きだけじゃ。

……反抗期ね……

反抗期ね

これだからダメね。

犬はつぐづぐ馬鹿だわ。

私の躰が成つてなかつたのか、それとも足りなかつたのか……。

ふん。

調子に乗っちゃつてさ。

いいわ。

いいわよ。

今のうちだけは貴方の言つ通りにしてあげるわ。

せいぜい可愛がりなさい。

やるなら徹底的にやりなさい。

最高に私を苛めてみせなさい。

そのうちにはすぐ貴方にこの首輪を譲つてあげるから。

今のうちだけ楽しんでなさい。

仮初の「主人様気分を。

所詮、飼われる側だといふことをよくよくと解らせてあげるわ。

今に見てなさい。

すぐに溺れさせたあげるわ。

「私の私に。

この私の可愛がり方を癖にしてあげる。

今度は完璧に、調教してあげる。

ほら、もう貴方の番ね。

早かつたでしょ？

いいわ。

いい。

素敵ね、その屈辱にまみれたお顔！

ああ…どんな首輪がいいかしら？

大丈夫。

今度は絶対取れないものにするわ。

オーダーメイドで作らせるから安心して？

ふふふ…。

やつぱり貴方にはこれがお似合にな。

貴方だからこそかしら？

ひとつも可愛くしてよ。

わア、跪いて私の愛を乞うなさい！

もうりん、最高に可愛いお顔でね。

そしたら、最高にいたぶつてあげるから。

楽しみになれー！

美しい死に方

どうせ死ぬならきれいに死にたい。

綺麗に。

奇麗に。

キレイに。

誰の目にも留まらずに一人死にたい。

あつという間に。

でも、どうせ人の死なんて汚いものよ。

ドラマやアニメや漫画や舞台のように、美意識の力ケラもない。

無神経な死に方をするの。

居合わせた人に嫌悪感しか与えないでしょ？

人の死なんて、まだ私はこの世で見たことがないわ。

この肌で感じたことも、もちろん実体験なんてもってのほか… 未
経験。

余りの悲しみで美化されるのかしら？

実際とは遠くかけ離れたそれで。

でも、美化なんて。

そんな偽物私には要らないわ。

どんな飾りも不要。

だって、私はきれいな死に方をしてみせるから。

けれど、そうね。

若い姿で、できれば死にたいわ。

そのまゝがきっと美しいもの。

醜く歳をとった私よりかは。

だからね。

私、この世界ともうお別れしなくなっちゃならないの。

さよならの時間まだあと少し。

じゅう。

じゃう。

は ち。

一

一
。

二
。

三
。

よ
ん

五
。

ろ
く

な
な。

零

一

どうせ死ぬのなら、できるならば大切な人たちに囲まれて死にた

なんて、ね
。

いわ。

醜くても構わない。

人に嫌悪感とか、抱かせてしまつたとしても。

私の死を悲しんでくれる人たちに囲まれて。

私が大好きな人たちに囲まれて死ねるなら。

多分きっと、それが私の最高の美意識。

私にとって最高の幸福。

きっと安らかに眠れるでしょう。

それって、人として美しい死に方じやない?

それだけ自分を想ってくれてる人がいることが判るもの。

そして、世界は平和になった。

ある日、あるとき。

その決意のせい。

あの子が幸せと言った日常を、俺が崩してしまった。

直接ではないけれど。

結果と言つか、間接的にそつなってしまった。

そして、俺からも奪われた。

唯一の女しきの場所と、愛しい愛しいあの子を。

ああ。

ひとり泣いてはいないだろうか。

孤独に怯えていながら。

一歩なり引きずり出された戦場と同じくの舞台で。

俺とあの子は再会を果たす。

ああ。

ああ。

じうじー、ビーハー。

お前がそんなとこりで怖い顔をして立っているんだ？

こんな争いがなくなるよつこと願つていたお前が、じうじー。

そんなとこりで生きている？

油断していた。

迂闊だつた。

こつ之間に俺の頭は平和ボケしてしまつていてんだ。

ありえない可能性ではなかつたはずなのに。

じうじー、ビーハー、ビーハー…。

今のお前の眼にはもう人を殺すことしか見えていない。

それでもお前はあとで血口嫌悪に浸るだらつ。

たくさん命を奪ひしとしか考えられなくなつた自分自身に嫌悪と憎悪を抱ぐだらつ。

俺と同じ。

自分が作った死体の山から下界を見下りして。

今日はどうな風に世界を壊してやるのか? などと、口元には笑みを浮かべながら。

ほくそ笑む。

凄惨な光景を頭の中に思い描きながら。

ああ。

ああ。

楽しみ。

と、そして、嘆くのだ。

自分がしたかったのは「んな」とじやないのに。

これでは本当にただの、悲しみを大きくするだけの殺戮者。

いや。

イヤ。

嫌。

否。

ちがうのよ。

もつともつと上手くやれると思っていた。

誰も傷付けずに創れると思っていた。

誰もが幸せになれる世界。

きれいごとかもしれないけれど、みんなそのために戦ってきた。

命を張つて。

やがて、気付くのだ。

それが愚かな行為だといふことを。

そんなやり方では憎しみしか生まれないと叫びたい。

それでも回りだした歯車は留まらない。

止まれない。

もう自分の意志だけではビリビリ成らないところまで来てしまつ
ている。

愚か。

愚か。

愚か。

そう言つて、笑う俺もその中の一人だ。

もう止まれない。

引き返せない。

引き返したくない。

今まで払つてきた犠牲を考えるとなおのこと。

何のために奪つてきたのか判らなくなる。

理由が欲しい。

それを正当化するための立派な言い訳が。

ああ。

醜いな。

いやな人間だ。

けれど、もう直せない。

そんなところはもう直せない。

直す必要はない。

俺が全てを成して見せよ!。

他者が本当に望む世界を造つてやる。

「の俺が。

「の俺自身で。

それが俺の言い訳になるのなう。

俺は終わりたい。

その罪ことらわれて生きていたくはないから。

肉体に同じ痛みを持つて。

終わる。

道連れにこの醜き戦いを背負つて。

俺の存在はこの世界の中ではちっぽけな命の一つに過ぎない。
けれど、この戦いを知る個々の中ではそれほど小さくはない。

その上にさらにインパクトもつけてやる。

俺は戦場である子を見つけた。

愛しい愛しいあの子を。

俺だけしか縋る者がいなかったあの子を、戦場で見つけた。

そのあの子に俺の死を与えてやる。

これで元の優しいあの子に戻つてくれたのなら、やつと世界はこういぼうへ変わるだろ？。

争いのない、平和の世界へと。

たとえそれがあの子に涙を引くとしても。

俺が居た過去と涙しか引かなくなってしまった。

おびただしい数を積んできた死体の山に、今日またつい俺自身が沈み込んでしまった。

やあ、やあ。

こままでめんよ。

けれど、今から俺も君たちの仲間入りだ。

やあ。

「ここにまだ

ひやしふつ。

「めんね。

俺の死体はあの子が積み上げた山のついでにきて、一生在るだ
ら。

きっとあの子は一生苦しみ、悲しみ続けるだろうが、それでも
俺は幸せだ。

あの子が作った死体の山のついでにあの子を見守れるから。

それはきっと、この世界のどの場所よりもあの子に一番近い場所
だから。

そして、少女は戦いをやめる。

戦いをやめ、明日を見る。

平和を探す。

手探りで一から。

何もない世界から幸せのある世界を創造すると決意する。

「それでもう、離れ離れにならないね」

貴方はするいよ。

するい。

私にやさしさをくれなかつた。

ぬくもりをくれなかつた。

こんな冷たさ、ひどいよ。

全然あつたかくないよ、寒いよ。

痛いよ。

悲しいよ。

……一人ぼっちだよ……。

私に大好きな貴方の大嫌いな冷たい体だけを残していくだなんて。

ひどいよ。

ひどい。

貴方のせいでとても私の腕が疲れるのよ。

いつもいつも、大好きな貴方だつた死体を腕に抱きしめてるから。
じゃないともう夜も眠れないの。

でも、幸せなの。

悲しいはずなのにな。

泣きながら、私は人々の幸せを願うの。

みんなみんな早く幸せに成仏してね、と。

そして、少女は今日も可憐に舞う。

新しい平和の世界のためへと。

世界が平和になるようにすること。

全ての争いの種を断ち切つてみせる。

この世から全ての。

もう…全ての種を。

だから、これは戦いじゃないわ。

平和を作るためのお掃除よ。

汚いものはゴミ箱へポイ…よ。

だからね、私の服はいつもすぐ赤色に染まつてしまつた。

でもね、平和の世界はもうすぐ来るの。

みんなみんな戦わずに済むの。

みんなみんなお空でひとつになつて笑えるよ。

だから、私頑張るね。

ほり、もうすぐ平和が来るわ。

戦いの種がない平和な世界が。

誰も居ない、戦いの音がない静かな平和な世界が。
もうすぐ出来上がる。

彼女の愛は彼を泣かす

君に会えなくて。

君に会いたくて。

けれど、会つても君はまつとも僕のことを見てくれないよ。

だから、もう会えなくていいよ。

さよなら、ばいばい。

また明日、だなんて嘯いて手を振り笑う僕。

君も同じようにいつづることが僕にとってどれほど残酷なことなのか、君は一生知る由もないのだうね。

だから、僕もウソツキでいいんだ。

君が僕にとつて残酷なら、僕は君にとつてウソツキでこみつ。

君といふ時間。

君と過ごした時間。

そのどれもがどこか虚しさしか煽らなかつた。

可笑しいね。

君のこと、嫌いじゃないのにね。

楽しいはずなのにな。

君がいつも誰かのことばかり考えているから。

僕の入り込む隙なんて全然なかつたんだ。

悲しい話さ。

けれど、だからこそ僕は君に普通に接していられたんだ。

怒りや嫉妬に駆られることのない、普通にいられた。

普通に笑っていられた。

嫉妬とか、全然しなかつたんだ。

可笑しいね。

君のこと、嫌いじゃないのにね。

君が他の誰かの事ばかり考えていてくれてるから、きっと僕は笑つていられたんだ。

初めから諦めて笑つてられたんだよ。

始まりも終わりもきつとなかったんだよ。

恋とすり呼べたかどつかも怪しこといひや。

けれど、それは確かに僕の中で芽生えていたんだ。

ほんの少しの、本当に短い間だつたんだけね。

完全なる僕の片想いさ。

けれど、それでも一応期待はしたんだ。

いくら初めから諦めてたと言つても、僕だって人間なんだ。

期待くらうするよ。

けれど、それが叶うだなんていう馬鹿な期待はしなかつたんだ。

独占欲とかそんなものもなかつた。

僕は特殊な恋をしていたんだろうね。

きっと、君を初めから諦めた状態でその上での恋をしていたんだ。

勝ち負けのない。

意味のない、悔しさのない逃げ腰だけの恋と呼んでいいものかと
悩むような。

そんな馬鹿なじつを一人やっていたんだ。

僕はきっと本気にならなかつたんだ。

君が全然僕のことなんか頭になかつたから、それが判つていたか
ら。

だから、勝負をしなかつたんだ。

僕は弱虫だつたんだ。

ちゃんと現実に向き合おうとしなかつた馬鹿。

君に断られるのが怖かつた。

だから、だから。

僕は間違つた方へとなけなしの勇氣を使つてしまつたんだ。

君に会えないよ。

君に会いたいよ。

けれど、君は僕を見ていないんだ。

それでも幸せそうに笑ってるんだ。

だから、ばいばいをしたい。

君に。

さよならを。

君が知らない間に、君とお別れをしたかった。

これで一応の決着がついたと思つたんだ。

馬鹿だな……僕。

声に出して言わなきや、君が他の誰かを想つてゐるなら、尚のこと。

声に出して言葉にしなきや、君には伝わらないのにね。

僕はそれさえも判らないほど馬鹿だったんだ。

そして、さよならをする。

けれど。

君はそれに気づいてしまって。

それを許してくれなかつた。

「ねえ、ねえ…貴方、いつまで私に嘘つくなつりなの？」

「貴方は」のあたりを最後に「一度と会わないとつむりなんで
しょ？」

「それは少し身勝手すぎると思わないの？」

「貴方、最低ね」

「私のこと、馬鹿にしてるでしょ」

「今まで悲劇の主人公気取るつもり?」

「かつこにい貴方のことずっと想つてて、考えてて、何が悪いの?」

「いいじゃない?」

「嬉しくないの?」

「どまリヤキモチ焼きなの?」

「貴方、本当に馬鹿ね」

「テレビに映つてる貴方観ていて恍惚とする」との何が悪いのよ?

?」

「『』めん。けれど、現実の僕はそんなにかつこよくないし、それに君が惚れ惚れとしてるのはそのドラマで演じた役のことだろ?...?」

「私の彼氏なら、もっと自意識過剰になんなことさよ...」お

「馬鹿！」

「貴方じやなかつたら氣にも留めてないわ」

「それは貴方が演じてゐるからこそ私を虜にさせたのであるのよ。」

けれど、それを彼女に言つと。

ただの子供じみた我痴だ。

独占欲でもない。

これは嫉妬じやない。

それが少し…かなり気にくわなかつたりする。

僕が演じた役の奴のことばかり考えている。

主役として僕が出てこないドラマばかりを観てしている。

彼女は最近いつも僕と会つていても、ドラマばかりを観てしている。

「彼氏ならそれくらいに気付くなやつよ」

「そんなこと思えるくらいで自信持ちはなやくよ」

「芸能人の貴方が一般人の私より不安になつてどうするのよ。」

「そんなに不安ならもうと私を愛しなさいよ。」

「なんで作り物に貴方が負けるとか思うのよ」

「馬鹿じゃないの？」

「やつぱり貴方だからこそ観る価値があるつてもんでしょうが……が……

うう。

嬉しいとは思ひけれど。

やつぱりひとつと納得いかないよ。

ここに本物が居るんだから、それに少しひらう構ってくれたつていいじゃないか。

そんなドラマの作り物の僕ばかり見ないで。

ここにいる本物の僕も見てよ。

本当の僕だけを見ていてほしいんだよ。

「いやーかね、貴方。どれだけ乙女チックなのよ。」

集中してたへりこで、変な物語作りなーで。

「お嬢さん。

花＝愛に素直な種族なのです。

私に思いやりの水を『えてください。

そしたら、きっと私は貴方だけのために美しく可憐に咲いてみせますから。

貴方のために生きます。

貴方に私の全てを捧げましょう。

決して負担にはなりません。

だから、そしたら貴方は笑つて私の最期を看取つてください。

ただお傍において頂ければそれでいいのです。

それが私の幸福へと繋がるでしょうから。

ただ貴方のその笑顔のために私は存在しているのですから。

だつて、この生命は貴方が育ってくれたものですから。

貴方が見つけてくれた、私というの名の生命ですか。

だから、私は貴方の愛に忠実にお応えしてみせましょう。

咲いて咲いて

舞つて舞つて

散つて散つて

消えて消えて

そして、芽吹いて。

またお会い致しましょう。

私に愛を下せ。

一滴の優しい愛を。

やつしたら、 もつ何も望みませんから。

私に勇氣を下せ。

一握り分だけの勇氣を。

やつしたら、 やつとどんな事だつて出来てしまつてしまふから。

私に優しさを下せ。

ほんの少しの優しさを。

やつしたら、 ケツとどんな事にだって耐えられるでしょ、つか。

私に私はいつかいつか溢れんばかりのあつとあらゆる想いを下さ

い。

悲しみも憐れみも優しさも喜びも楽しさも好意も嫌悪も怒りも憎
悪すらも。

私に全て託して下さい。

やつしたら、 やつと私はそれだけで幸せに咲けるでしょうから。

私に私に貴方という存在の証を刻み付けてください。

そうしたら、私は貴方のためだけの美しい花を咲かせられるでしょうから。

私をかたどるのは全て貴方の愛情なのです。

貴方が愛してくれた分だけ、私は奇麗になれるでしょう。

この身を以つて、この一生を以つとして私は貴方の愛に従順に応えるのでしよう。

貴方が愛してくれるから、私も貴方を愛せるのです。

愛してます、私を愛してくれる人。

貴方が私を見放さない限り、私は貴方を絶対に裏切ることなく、傍で貴方を癒すでしよう。

だから、一番目の私が消えた後も私のことを愛していく下さい。

そうしたら、きっと一番目の私が貴方の愛に報いるでしょう。

私の愛した私はまた貴方の愛に応えて美しくなるでしょう。

幸せそうに貴方に笑いかけるでしよう。

だから、私を愛して下さい。

貴方の愛がなければ私は生きられないのですから。

散り際に残るは種。

その繰り返しの中で私は生まれて、私は受け継がれていくのです。
私を愛してくれた貴方が悲しまないようには次の生命の源を残して
いきましょう。

貴方が私のことを忘れないでいてくれたなら、そしたらきっと私はまた貴方のために花を咲かせられるでしょう。

美しい花を貴方にあげます。

「覗にいれてみせましょう。

愛しい貴方に。」

だから、どうか笑つてくださいな。

私を愛してくれる優しい人よ。

刺傷

刺傷。

それは刺す事でできる傷。

とてもとても痛いもの。

けれど、私がここに生きていのと一つ違くなってしまった。

刺傷。

それは他者を心に宿したからでなくなってしまったもの。

とてもとても苦しいもの。

けれど、私が独りじゃないことにつけてなること。

刺傷。

それは運がしさからできてしまったもの。

とてもとても悲しいもの。

けれど、私が誰かに運ばれているところになること。

刺傷。

さしあげ。

サシキズ。

人が常に孤独と戦っているという壁にあるものの

私は貴方を愛しています。

とてもとてもとてもとてもとても。

愛おしく思っています。

お慕い申しております。

貴方に向けて幾度この気持ちを紡いでも、貴方に全て伝えきれない。

いくら言葉にして示そうにもそれだけでは足りない。
もつともつともつともつともつと。

貴方にこの想いが伝わればいいのに。

この思いが。

この想いが。

この重いが。

このおもいが。

このオモイが。

貴方を埋め尽くしてしまえればいいのに。

そしたら私だけをみていてくれるでしょう？

貴方は嫉妬に苦しまなくてすむでしょう？

そう言えば貴方は笑う。

無邪気に顔を歪めて、微笑む。

私のこの手に鎖を巻きつけながら。

とても重い鎖が手首を締め付けていく。

ああ。

この重さは貴方の私への狂氣すぎる想いの重さだ。

私に対する執着と依存。

これがあるから貴方が苦しむ。

けれど、これがなければ貴方はもう生きていけない。

きっと私も生きていい。

いくら言葉にしても足りなかつた。

この想いは貴方に全部伝えきれなし

卷之三

卷之三

とてかとてかとてかとてかとてかとてか。

切ない!

だから。

貴方に伝わるようになります。

だから、許すの。

貴方が私にしたように。

私も許すの。

互いの想いを刻み付ける苦を一生背負つことを。

貴方が伝えよつとしてくれる愛を私が受け止める」とを。

言葉以外で示すとじててくれる貴方のこの恋愛を。

私自身の身を張つて受け入れることを。

痛みの伴う滑稽なほどのその想いを私にぶつける」とを。

私がここに生きていて愛されているといつ証を。

私は笑つて享受する。

私は貴方を愛しているのに。

貴方は私を愛してくれてゐるのに。

それなのにそれでもまだ信用できないなんて。

なんて憐れな私たち。

縛つて傷付けあつ」とでしかお互の愛を証明できない。

束縛しあつてでしか信じる」とができない。

それがひどく痛く、苦しく、悲しく、愚かで滑稽なことだと知りながらにしてもな。

それでも、ああ。

私たちほ互いを。

まだ。

きっと。

ずっと。

一生。

永遠。

「……愛おしへ思つのでよ」

貴方も私も刺傷だらけ。

私たちの愛はまるで鋭くとがった刃のようだから。

それが互いが触れ合つたびに互いを貫通させて。

それが愛の証になつて、幸せと呼ぶに値する。

身勝手な傲慢

「めんね。

「めんね、ごめんなさい。

貴方をおいて逝くこと。

私独りで逝えて逝くこと。

勝手に決めてしまったこと。

身勝手に振舞つてしまつこと。

「めんね、ごめんね。

全部私独りで背負つっていくこと。

貴方に痛みを与えたこと。

貴方に悲しみを与えること。

「めんね、ごめんね。

許してね。

大好きだよ。

大好きだったよ。

私を好きだと黙ってくれた人。

私が好きになつた人。

泣かないで、泣かないで。

せめて微笑んで見送つて。

最期の抱擁は思いつきりがいいよ。

最期の口づけは優しくがいいよ。

最期の言葉は大好きがいいよ。

サヨナラなんて辛氣臭い言葉は貴方に必要ないよ。

サヨナラは全部私のものだから。

私が全部引き連れていくんだから。

だから、貴方はどうか笑つていて。

私にサヨナラを告げて泣かないで。

とても酷なことを言つてるのはわかつてるよ、ちゃんと。

だけど、きっと貴方が私の立場だとしたら、貴方もそう言い残す
でしょう。

全部全部私が連れて行つてあげるから、貴方は私がいなくなつた悲しみだけに集中していて。

笑つて笑つて。

せめてこの瞼が閉じるその瞬間までは微笑んでいて。

そのあとはたくさん泣いてもいいから。

けれど、こつまでも泣かないでいてね。

私も悲しくなつちやうかひ。

だから、しばらへしたらまた笑つてね。

私の大好きな貴方でいてね。

はじめは、さうなくでもいいよ。

けれど、作り笑いはやめてね。

それは貴方の本当の笑顔をきつと奪つてしまつだらうから。
そしたら私、きつと寂しくなつちやうかひよ。

だから、笑つていてね。

時々泣いてもいいから。

そのときは私を思い出さないでね。

貴方の心の傷口がまた開いて悲しみが漏れ出してしまったかもしれないから。

寂しくなつたら好きな人に抱きしめてもらいつといいよ。

それは私にとつて、とてもとてもつらいことだけれど、私はもう貴方を抱きしめてあげられないから。

貴方を抱きしめることのできるあたたかい腕を持っていないから。けれど、貴方が好きになつた人だもの。

きつと素敵な人なのでしょう。

だから、私は少しの嫉妬に駆られながらもきつとホッと息をつけるでしょう。

ごめんね、ごめんね。

許してね、どうか許してね。

私が私を取り払おうとしていること。

私が私として最後まで生きよつとしなかつたこと。

不意に足元がふらついて。

闇に目がくらんでしまつたの。

貴方の傍で最後まで貴方を支えてあげられなくて悔しいよ。

大好きだよ。

大好きだったのに、私、私自身に負けたの。

どうか幸せになつてね。

つらくても私のこと忘れないでいて欲しいよ。

他の人を好きになつても、私のことを一番田に愛していく欲しいよ。

もし子供ができるなら三番田でもいいから忘れないでいてね。

私つてば未練がましいな。

私が勝手にしてしまつたことなのにな。

貴方を無視して、貴方の前から姿を勝手に消しておいてなお貴方を束縛しようとするなんて。

かつこわるいや。

けれど、それくらい貴方のこと好きだつたんだね、私。

「めんね、」「めんね。

私、泣いちゃうよ。

貴方と一緒に居られないのがとても悲しくて寂しいの。

もう話すこともできなくなつたのがとても悲しいの。

我僕な私で「めんね。

「めんね、「めんね。

きつと私、もう笑えないよ。

けど、貴方には笑つて居て欲しいと傲慢にも思つ私を許してね。

大好きだったよ、私を好きで居てくれた貴方のこと。

月夜恋慕

まるごまるい月が一つ在るよ。

遠くに見えるの。

滲んで一いつに見えるよ。

貴方は一つなのに。

手を伸ばして請い願おつと決して届く」とはない。

穢れを知らぬ純粹純真無垢なる月よ。

私は貴方に恋をした。

いつからだつたかは定かでない。

けれど、多分それは一曰惚れだつた。

毎夜毎夜、貴方を探した。

たとえいくら遠くにいようとも。

この眼で貴方の姿を捉えられるだけまだ幸せだと思つ。

けれど、何度も何度もあまりに遠すぎる距離に舌打ちした。

海が作れるほど涙を流した。

貴方を恨んだこともあった。

私はこんなに愛しているの!。

私はこんなに求めているのに。

貴方は露知らぬ顔つきでいつも優しくただ微笑んでるだけ。

それはとてもとても由々しいと思つた。

貴方は一生決して誰も愛しはしないのだらう。

「本当に、君自身を捨ててしまつのかい？」

「ええ。でないと、あの人の笑顔は見れませんから」

「…そりが。では、仕方ないね」

「はー」

「君は、自身のすべてを手放すことを行ふんだね」

「すべてを手放す」とを了承…？」

「違うのかい？」

「私は、命は捨てても手放すものなんて何もありませんよ」

「それはどうこいつとなんだ？」

「私は、あの人の笑顔さえあればもういいのです」

「それは、君のすべてを手放すとは言わないのかい？」

「はー」

「…君は本当に、訳のわからない子だね。君の手元には何も残らないだろ?」

「私の手元に残るも何も…初めから何もないですか？」

「…君は頭の堅い子だね。そんな考え方ではさぞ疲れただろう」

「何とも言えませんよ」

「君は初めから空っぽだった。何も手放すものはない。では、これからその人の笑顔を手に入れに行くのかい？」

「厳密に言えば少し語弊がありますがね。私が取り戻す原因になつてもそれは私の手には入らない」

「…君さあ、そろそろ鳥かごから出てみてはどうだい？もう錠は外されてる。出口は田の前に開けてる」

「あそこには、あの人の笑顔はないのです…」

「君の居場所だろ？？」

「今となつてはもう判りません。きっと兄も私に愛想を尽かせて見放していることでしょう」

「では、君の言つあの人は？」

「…あの人は、私のことなんてきつともう憶えていませんよ。余り人前に姿を出さなかつた私ですから物珍しさで遊ばれたのでしょうか。所詮、雲の上の手の届かぬ存在の方だつたつてことですね」

「…君は嘘つきな子だね。そんなに好きなら傲慢を押し通してはみないのかい？」

「私はそこまで我が強くはないんですよ、」少しうれしも

「けれど、君がしようとしない理由は本当に君の言つた人のためになることなのかい？」

「なくともならなくとも。もつとこれまで来てしまってましたから引き返すことなんて、できなことですよ。……ね？」

「つぐづぐ悲しい子だね、君は。自分には何もないと言つて、あの人の笑顔だけがあればもういいんですだとか言つて。それは君に手には入らない。……君は自分が消えることによってあの人に笑顔が戻ると思つてここに来てるのだろう？ 笑顔つて、そんなに大切なものなのかい？ 一生傍にいられる」とよつもずつと？」

「……多分、そうだったんでしょうねえ……」

「じゃあ、残念だつたね。君が命を投げつてるのに笑つてたら、その人はきっと、」

「狂ひじゆんでしようねえ……」

鍵をかけて心を閉ざしてしまったなさい。

きっと私は楽に生きられるでしょうね。

嫌なことからは田を背けてしまいなさい。

犯した罪なんて忘れてしまいなさい。

そして、誰よりも何よりも愛しいと思った人のことも忘れてしないなさい。

その感情も捨ててしまいなさい。

その人の笑顔のために。

私が私として生きていくために。

苦しくてたまらなかつた。

息もままならないくらいに。

決して貴方しか見えていなかつたわけじゃなかつたのに。

いつの間にか気付けば貴方の腕の中、閉じ込められて外の世界を見ていた。

好きだと囁いて。

囁き返されるたびに、囁き返すたびに罪の深さを思い知る。

優越感に浸れるから私はこの腕の中に居るのだろうか。

罪を犯した。

貴方となら犯してもいいと思った。

たとえ周りに軽蔑されて呆れられようとも。

鍵をかけて、そのまま口の光を見ることができるなくねればいい。

騙していく。

すべてが幻であったのだと。

ただの戯れだったのだと。

嘘をついてこのまま死ねたらいい。

嘘をつかれてこのまま殺されたらい。

愛を紡ぐ唇を塞いで。

息もできなくなるくらい。

言葉を失くして声を失くして。

愛したことさえ告げなき、ベッドに寝かしつかてくれればいい。

嘘をついて。

一人だけの嘘を。

耐えられなくなつたなら心を開いてしまいなさい。

貴方をえものぞくことのできない扉を作ってしまいましょう。

貴方も開けることのできない鍵をかけて。

眠りてしまいなさい。

深く深く。

息も凍るくらい。

そのまま田が覚めなければ。

貴方はきっと解放されるでしょう。

そしたら、私は楽に生きられる。

貴方の温もりに苦しまなくてすむ。

苛まれる牢獄に貴方だけを取り残して私は死んでしまってさう。

愛して。

愛して。

愛します。

愛しました。

貴方の笑顔、眩しかつた。

嘘について。

騙されないで。

嘘つきって嘆いていいのは私だけです。

貴方は素知らぬ顔で軽蔑の目をむけてればいい。

このまま呑えないなら。

貴方の笑顔を求めて旅にでてしまおつか。

ふいに、意識が現実へと引き戻されて。

私は再び目を覚ましてしまった。

「…なにを、泣いているのですか？貴方は」

みつともない。

みつともない。

みつともないですよ、ばか。

「私を呼び戻したひどい御方は、貴方ですか？ねえ…」

あのまま死んでしまえたら、私はきっと自由になれたのに。

雜音が耳に届いてしまって。

「貴方の声が聞こえた気がして、」

私の名前が呼ばれた気がして。

「連れ戻されちゃいましたね、貴方に」

どうやら、貴方を牢獄にひとりぼっちにしておいたとした私を、貴方は見逃してくれなかつたようだ。

「なんてひどい人

なんてひどいお顔。

まるで。

「私がいじめたみたいじゃないですか」

そう、少し意地悪をした。

「もお…なんてダメな人」

私が居ないと生きられないなんて。

「ほら、笑つてくださいな。ね？」

貴方の笑顔を求めて私は旅にでようとしましたところに。

貴方は簡単に笑うものだから。

私はすぐに見つけてしまつて。

旅立つ理由がなくなっちゃいましたよ。

「私、貴方の笑顔が大好きですよ」

たとえ牢獄であろうともそこに貴方の笑顔があるのなら。

貴方が笑いかけてくれるのなら。

私はそこで生きましょ。

目が覚めた瞬間、視界に映った貴方の姿に。

生き地獄を味わえと言われたようでしたけれども。

「貴方が愛してくれるのならもう地獄だつて構いませんよ」

私の愛しい愛しい共犯者さん。

一緒に罪を償いましょうか。

そして、堅く錠を落とした扉は開けた。

愛とはなんぞと聞いてましょう

貴方に私の心を触らせて、それで私が死んだら貴方のせい。

だから、私に触れてこないで。

気持ち悪いだけ。

不愉快なだけ。

貴方が中途半端に私を愛するから私はそれに応える」と答えできやしない。

貴方が何に惹かれて私を縛り付けるのかがわからない。

理由も告げずに押し付けられたって、それはただの迷惑でしかない。

理由を述べられてもきっと私は一生理解しないのでしうつナビ。

愛して欲しいなら私が私じゃなくなるまで待つていいなさい。

もつとも、私が死んでもそんな日は来ないでしうつナビ。

24時間失恋。

泣いて縋つて引き止めたってダメ。

失恋バイバイ。

失恋万歳。

失恋最高。

あら、失礼さよなら。

好きだつて笑つてみせてもだめ。

好きだと告げていいなんて言つてないわ。

さよならバイバイ。

その泣き顔くらいなら最高だと思わなくもないわ。

少しも情がわかぬいけども。

好きだと思えない。

いつまでも傍に居たつて。

貴方はいつまでもひとりぼっちのまま。

寂しい？

つらい？

悲しい？

私は貴方を愛さない。

愛せない。

24時間永遠に。

声をだして泣いてもだめ。

愛してなんかやらないわ。

私をしづく抱きしめてもだめ。

顔を痛みに歪めるだけで終わるわ。

無理に抱いたってだめ。

無効化無効化。

私の無関心をひどくするばかりよ。

私の神経を逆撫でするばかりよ。

病んだ外の景色。

無色透明の窓ガラス。

グラスを割つて、破片でこの喉を引き裂いて。

愛を紡ぐ声なんて初めからありはしなかつた。

貴方が欲しいと望んだものを私は『えよ』としなかつた。

愛して欲しいなんて、要求した覚えはなくつてよ？

愛なんて要らない。

そんなものなくとも人の身体は動くのだから。

愛を紡ぐ唇は嘘つきばかり。

それで私を騙して墮落させるつもりなのでしょう？

私はあなたの様にはなりたくない。

病んだ瞳に映りこむ貴方の姿は滑稽すぎた。

憐れみを誘うような情けなさで私に縋り付いて、助けを求める。

そうやって私を羽交い絞めにして身の自由を奪つたとしても。

私は永遠に貴方のものにはならない。

束縛してこの虚ろな身体を抱いてればいいわ。

いつかは腐つてしまうもの。

貴方が愛した私だつて。

所詮、たかが百年ばかりしか生きられない人間なのだから。

私の身体が腐るほどの時が過ぎたとしても、きっと私は貴方を愛さない。

ずっと永遠に。

そう、24時間どれだけ一緒に居たつて。

貴方はひとりぼっちのまま。

貴方の求めた私は貴方を振り返らない。

痛みを誘うような愛ばかり注がれても私が傷むだけ。

滑稽すぎて笑いさえもう零れやしない。

なんて可哀想な人なのでしき。

私に愛されなくて愛されたくて堪らないのに。

そんな私を愛して愛して愛しすぎて今にも狂つてしまいそうな貴方なのに。

そんな私にまつたく愛されないなんて。

なんてなんて悲しい人なのかしら。

24時間さよならバイバイ。

私のせいで失恋だらけな貴方に。

貴方のせいで傷だらけな私から。

24時間失恋バイバイ。

「もう終わりにしましょう」

そうして私は初めて私の笑顔を貴方に与えて。

貴方をきつくな笑顔で突き放したの。

さよならバイバイ。

24時間失恋よ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5018f/>

それは誰かの足跡

2010年10月21日20時29分発行